さよならプラネタリウム

瀧川新惟

表紙 れもたろ

鶏卵文庫

さよならプラネタリウム

（二〇五五）プロローグ
（二〇一九）ピルグリム
（二〇三四）星とロボット
（二〇三八―四五）プラネット・デイズ
（二〇四八）花菱プラネタリウム異状なし
（二〇三一・回想）プロローグ　その２
（二〇四九）プロローグ　その３
（二〇四九）断章
（二〇五〇）ケンタウルスを見上げて
（二〇五六）エピローグ

（二〇五五）プロローグ

わたしは星を見上げている。
そう、星だ。
あまりにも細く走った、何ヶ月ぶりかの――いや、何年ぶりかも知れない僅かな雲の切れ目からかすかに覗く星を、わたしたちは見上げていた。

――わたしたち。
腕の中の小さな子……わたしの子。
その温かなものを、壊さぬように、しかし、しっかりと抱きしめる。
腕の中の子が、声もなく、小さく身じろぎをした。
この子にも、あの星が見えているだろうか。
きっと、そうだろう。
そうであってほしい。
この日のことを、どうか覚えていてほしい。

わたしは思いだす。
いつか遠い昔――お父さんの腕に抱かれて星を見上げていた記憶を。
いつの頃のことだっただろうか。
世界がまだ暗闇に覆われる前。
世界に『雨』が降り出す前。
そう、あれはたしか、わたしが――

（続）

さよならプラネタリウム

（二〇一九）ピルグリム

静岡県浜松市北区引佐町
大島家（倉橋家母方実家）
２０１９年10月12日（土）20時14分

――あれはたしか、わたしが幼稚園の年中さんのときのことだ

@　　@　　@

わたしが生まれる前から、吾朗くんのお父さんは東京に単身赴任していて、あの頃も吾朗くんのお母さんは、月に二度、三度と東京の家に出かけていた。夫婦仲良しということもあるだろうけれど、それ以上に吾朗くんのお父さんに生活能力がさっぱりなかったのだと、吾朗くんのお母さんが笑いながら教えてくれた（これは、わたしが高校生の頃だから、ずいぶん後年のことだけど）。

ともあれ、吾朗くんのお母さんが家を空けているときには、吾朗くんはいつも、わたしの家に預けられていた。年もそんなに離れていないし（吾朗くんが5つ上だ）、吾

朗くんの家からわたしの家まで田圃の間を歩いて二分のご近所さんだ。なにより、うちの両親が吾朗くんのご両親と気が合ったのが一番大きいだろう。

その週末は、月曜日が体育の日でお休みで、土曜日から月曜日の三連休だった。

吾朗くんのお母さんはさっきの事情で不在にしていて、例によって吾朗くんはわたしの家に泊りに来ていた。

――はずなのだが、せっかくの連休だから、とお父さんが言い出したおかげで、わたしたち一家と吾朗くんは、静岡市の北のはずれ、引佐の井伊谷の奥にある、おばあちゃんの家に泊まりに行くことになったのだ。

@　@　@

わたしのおばあちゃんは、中学校の理科の教師をしていたひとで、あの頃はもう教師を定年退職して、生まれ故郷の山奥の村で（合併されて町になっていたけど）畑を耕しながら悠々自適の生活をしていた。

おはあちゃんの家は、谷沿いの集落の山際で、北側の斜面に立っていたから、集落の中では日当たりは良好だった。

ということはつまり、とりもなおさず、南の空……つまり月がよく見えるということでもある。

そう、月。

これもまた調べてみると、あの日の月齢は十三。

満月の一日か二日前で、夕飯が終わる頃はちょうど、東の空から月が昇ってきている時間だっただろう。

おばあちゃんは料理が上手で、そりゃ都会っぽい、洗練された料理ではないけれど、いゆる田舎の料理をとてもうまくつくるひとだった。特に、甘辛いおあげと干しシイタケが入ったキンピラゴボウがとてもおいしくて、それは今ではわたしの料理のレパートリーのひとつになっている。

キンピラゴボウはあの頃のわたしにはハードルが高かっただろうけれど、似たものではちょっと甘め濃いめの味付けのいなり寿司がとてもおいしくて、そればかり食べてはお父さんに窘められていた記憶がある。

一方でおじいちゃんは料理趣味者というやつで、わたしたちが遊びに行くと、いろいろなものを燻製にして振る舞ってくれた。

お父さんはウイスキーに合う、といって喜んでいたけれど、おばあちゃんに言わせると、家事としての料理はしないのだから、要するに趣味よねえ、ということだった。

そんなわけで、あるいはあの日も、お父さんはおじいちゃんの作った燻製を楽しん

でいたかも知れないが、おそらく……いや、確実に、お酒は飲んでいなかっただろう。
なにしろあの日、お父さんは――新しく手に入れた天体望遠鏡に夢中だったはずだからだ。

@　@　@

「すごいですね……」
吾朗くんとわたしは、お父さんが天体望遠鏡を組み立てるのを、縁側に腰掛けてじっと見つめていた。
季節からすると、たぶん、辺り一面に秋の虫の声がしていたはずだ。
「ああ。これのためにお母さんを説得するのに、半年はかかったからね」
「ちょっと、お父さん」
たしなめられて、お父さんは悪戯っぽく舌を出したかも知れない。
もちろんこれは、五歳のわたしの記憶にある風景ではなくて、もしかしたら、そんな会話があったかも知れない――と想像するばかりなのだけれど。
――わたしの不確かな感傷は置いておいても、とにかくあの夜は、天体望遠鏡だった。
重くて大きい鉄パイプに、きらりと輝くレンズが嵌められている。それを、がっしりと地面に足をつけた三脚に乗せて、ぎっしりとねじを締めると、お父さんは自慢げ

にわたしたちのほうをふりかえってみせた。
「もう、見えるんですか？」
「調整したらね」
お父さんはそういうと、ファインダーをのぞき込み、接眼部を覗き込み――たぶん、お父さんはそうしたと思う――バランスを整えた。
そして、なにかに狙いをつけるようにして鏡筒を動かして――よし、というふうに頷いた。
「二人とも、こっちにきてごらん」
ふたり、というのはわたしと吾朗くんのことだ。
わたしは、ちらりと吾朗くんのほうを見た。
当時のわたしは、見慣れないものに尻込みしたのかも知れない。
「よし、吾朗くんからだ」
「いいんですか、さっちゃん？」
「うん」
こくりと首を振ると、吾朗くんは、お父さんの隣にてくてくと歩いていって、
「……ここから覗くんですね？」
接眼部を指さした。

「そうだ。見てごらん」
吾朗くんは、すこしだけしゃがみこんで、接眼部に眼を近づける。
そして、
「うわあ……」
感嘆の声をあげて、それからしばらく、そのまま望遠鏡をずっと覗き込んでいた。
——これは、明確にわたしの記憶にある光景だ。
なぜならばわたしは、その吾朗くんの様子を見て、あの筒のなかに一体何があるのだろう——とひどく胸がざわざわしたのを覚えているのだ。
と、吾朗くんが天体望遠鏡から顔を離し、ひょいとわたしのほうを見て、
「さっちゃん」
呼んだ。
わたしはそっと天体望遠鏡のほうに歩み寄る。
吾朗くんが覗き込んでいた接眼部は、頭の上のあたりにあった。
「すこし待ちなさい」
お父さんは、たぶんキャンプ用の小さな椅子だと思う、それをもってきて、望遠鏡の前に座った。
それからわたしを、その膝に抱きかかえてくれて、
目の前に、天体望遠鏡の黒い接眼部があって、

わたしはそれを覗き込んで――

そこに、突然――金色の大きなお皿が、きらきらと輝いていたのだ。

それはもちろん、月だっただろう。

だけど、あのとき、はじめて天体望遠鏡を覗き込んだ小さなわたしには、それが月だとすぐには判らなかった。

呆然とその、美しいものを見つめ、声も出せずに立ちすくんでいた。

「月だよ、それは」

吾朗くんが優しくささやいた。

「見てごらん」

言われて望遠鏡から目を離し、空をみる。

望遠鏡の指す先、空の――おそらくははるか彼方に、月がぽっかりと浮かんでいた。

でも、それはさっき見た金色のお皿とはまるで違って見えて……

わたしはまた、天体望遠鏡をのぞき込む。

そこには、さっきとかわらず、大きな大きなその姿が、ぽっかりと浮かんでいたのだ。

わたしは飽きもせず、その月を……その陰影を、輝くものを、ずうっと眺めていた。

ずうっと、ずうっと。

そのあいだ、お父さんはわたしをしっかり抱きかかえてくれていて、吾朗くんはそっと、わたしの隣にいてくれたように思う。

あの時のことを、今までわたしは、一度たりとも忘れたことがない。

そう。

今から思い返してみれば――この日のこの場所こそが、わたしと吾朗くんの長い長い旅の、その始まりの場所だったのだ。

（続）

（二〇三四）星とロボット

再会と言うほどでもないのだ。

なぜならば吾朗くんは、東京に引っ越してからも、毎年盆暮れには浜松の家に戻ってきて、初詣やらなにやらを一緒にしていたから。

でもさすがに、吾朗くんが花菱デパート屋上プラネタリウム館にやってきた時には驚いた。

なにしろ、連絡があったのは新年度も明けてしばらくした四月の終わりのことで、その一週間後には、あまりにも早々に、吾朗くんはわたしの職場にやってきたのだ。

それも——あろうことか——女の子を、それも、人間ではないロボットの女の子を同伴して！

@　　@　　@

静岡県浜松市中区肴町

有楽街　居酒屋「鳥よし」
２０３４年５月15日（月）21時36分

「えーと……倉橋さん？」
吾朗くんはわたしの隣に座って、苦笑いの表情を浮かべている。
その顔に妙に腹が立って、わたしは文句を言おうと口を開き、
「おぐええ」
妙な声が出た。頭がくらくらして、ひどく気持ちが悪い。
と、先生……もとい館長がひょいと顔を出した。
「なあ、三ヶ島君。倉橋君って酒癖が悪いのかい？」
「いやあ……倉橋さんがお酒呑むのなんて……そもそも今日が二十歳の誕生日なわけですし、お屠蘇くらいはありますけど」
「そうかあ。そうだよねえ……まあ、初めて呑んだ日にしちゃ、いろいろタイミングが悪かったね、こりゃ」
「そうなんですか？　そういえばなんだか機嫌悪そうでしたけど」
「自覚なしか、こりゃ倉橋君も大変だ」
「どういうことです」
吾朗くんと館長の会話が妙に気に障る。

「あろえぇ、ごろぅくんはね……」
あれ、今自分は何を言おうとしたのか？
「大丈夫？」
吾朗くんの心配そうな顔に、わたしは、
「だいじょぼ……」
思わず口を押さえた。
これは――吐き気、というやつだ。
やばい、と思って、そのとき、
「トイレ行くよ。三十秒我慢して」
言うと、吾朗くんはわたしの背中に腕を伸ばして……

それから先は、覚えていない。
わたしの初飲酒は、そんな風にまあ、率直に言えば最悪だったのだ。

@　@　@

静岡県浜松市東区大瀬町
倉橋家
２０３４年５月16日（火）12時45分

「……里美？　里美、起きてる？」
遠くから聞こえるお母さんの声に、ぼんやりと意識が浮上した。
あたりは明るくて、布団に寝転がっていて、どうやらそこはわたしの部屋らしかった。
起き上がろうとして、胃のあたりがなんだかむかむかすることに気づいた。
おまけにひどく頭が痛い。
ふすまが淡々と開けられ、お母さんが顔をのぞかせた。
「ちょっと、里美？」
「起きてる……」
がらがら声だった。
が、どうやらお母さんには聞こえたようで、次のお母さんの声は、まるで、やれやれ、と言わんばかりだった。
「吾朗くんが来てるわよ」
「吾朗くん？」
「里美、あなた、吾朗くんにありがとうお言いなさいね。昨日、さんざん面倒みてもらって、タクシーで送ってもらったんだから……覚えてる？」
「タクシー……？」
全く記憶にない。
はあ、とお母さんが今度は、明瞭に、言い聞かせるようなため息をついた。

「里美。そういうの、なんて言うか知ってる？」
「……？」
「初めてだから知らないだろうけど、それね、二日酔いっていうのよ」

@　@　@

「面目次第もございません」
「まあ、いいですけどね」
吾朗くんは、いつも通りに笑ってみせる。
なんだかひどく申し訳ない気分になって、思わず首を竦める。
「ほんとに里美がねえ、いつもお世話になって」
お母さんが、まるでフォローを入れるように――いや、ように、ではなくてそれそのものなのだろうけど――言った。
「大丈夫ですよ、天文研で慣れてますから……それに、昨日は僕が、止めなきゃいけなかったですね」
「だから気をつけなさいって言ったんだけどねえ……」
「……」
わたしは黙って目の前のお味噌汁に口をつけた。

なんでも、しじみの味噌汁は二日酔いには一番いいそうだ。
抜けているミネラルに塩分にを補給できるとかで……それらのものがどうやってわたしの体から抜けていったのかは、とりあえず考えないことにした。

昨日、有楽街のお店でぶっ倒れたわたしは、館長やら吾朗くんやらに介抱されて、結局吾朗くんがタクシーでわたしの家まで送ってくれたということだった。
「あなたも一応女の子なんだから！」
とお母さんは多少心配そうに言ってくれた。
一応っていうのはどういうことなのか気になるけれど、しかしお母さんの言うのはそのとおりだ。
「きをつけます……」
「まあ、吾朗くんがいてくれてよかったよ。先生にお世話になるんじゃ、あなた、上司なんだから」
お母さんは、館長のことを、いまだに「先生」と呼ぶ。高校の頃の担任なのだから、仕方ないといえばそうなのだけれど。
ちなみに吾朗くんは、わたしを送り届けた後、しばらく様子を見ていてくれたらしく、結局お母さんが車で送ってくれたということだった。
申し訳ないやら何やらで、わたしはもごもごと頭を下げるばかりだった。

お味噌汁をあけて、ぬるい麦茶をくちにすると、だいぶ体が楽になった気がした。
「とりあえず、もうすこし寝てなさい」
と言われてはじめて、自分が昨日の夜の格好のままなのに気づいた。
突如なにか、ひどく恥ずかしくなって、
「シャワー浴びてくる」
とだけ言って立ち上がり……それから、吾朗くんのほうを、ちらりと見た。
吾朗くんは、
「……お母さん、電源お借りします」
とだけ言って、鞄からノートパソコンを取り出した。

@　@　@

熱いシャワーを浴びると、ずいぶんとすっきりした。
ひどい脂汗みたいなものをかいていたらしい。
パジャマに着替えて居間に戻ると、吾朗くんがちらとこちらを見た。
「多少良くなりましたね、顔色」
「だといいんだけど……」
「多少ですけど。やっぱり寝ておいた方がいいですよ」

「うん」
素直に頷いて、寝室に足を運ぶ。
寝室といってもまあ、要するに障子を隔てて居間の隣だ。
外はよく晴れて、春と初夏の端境期。
風を通しておきたいという理由で障子は開けておくことにした。

布団に寝転がって居間のほうを見ると、吾朗くんは、なにか熱心にかたかたとキーボードを叩いている。
卓袱台にノートパソコンを広げて、少し猫背気味であぐらをかいているのが、いつもの吾朗くんだ。
――そのパソコンで、なにか、ゆめみちゃんのことをしているのだろうか。
仕事だから、そうかな。
と、
「よし」
吾朗くんが小さな声で呟いた。
「……なにかできたの？」
声をかけてみる。

「うん。使ったことがなかったツールを試してみて、うまく動いたんです」
「お仕事？」
「まさか」
わざとらしく肩をすくめてみせる。
「休みの日ですよ。好きなことをしていたいじゃないですか」
「……ごめんね、こんなイナカまで」
と、吾朗くんの声がすこし慌てた風になる。
「そういう意味じゃないですよ。自転車も乗りたかったし」
「自転車で来たの？」
「はい。少しは運動しないと」
「ゆめみちゃんの面倒みてるのかと思った」
一瞬間があって。
「休館日は寝てますよ。あの子は」
「そうじゃなかったら？」
「リモート監視してますからね。ラボの方とトリプルチェックですし、僕の休みの日は休みです」
「ふうん……心配じゃないんだ」
「心配っていうなら、今の里美さんのほうがよっぽど心配ですよ」

「……」
「ま、僕は適当にやってますから、ゆっくりしてください。目を閉じてるだけでも違うって言いますし」
「なんだかそれ、わたしの方がオキャクサンっぽいね」
「勝手知ったる他人の家、ですからね」
吾朗くんが飄々とおどけてみせて、わたしは思わず小さく笑った。
そして、吾朗くんの言うとおりに目をとじて、吾朗くんがキーボードをたたく音を聞いていいるうちに――いつのまにかまた、わたしは眠りについていたのだ。

@　@　@

ゆさゆさと体を揺すられる感覚と、聞こえてくる声――わたしを呼ぶ声に、意識がゆっくりと覚醒していく。
「――さん、里美さん……」
わたしが目を覚ましたのがわかったか、その声は――吾朗くんは、ひょいと動きを止めた。
「……おはよう?」
疑問形になった。

「おはよう。もう夜だけど」
「……？」
時計はどうやら、夜の八時過ぎらしかった。
気分は……悪くはない。
いやな汗もかいていない。
「ええと、おはよう、吾朗くん」
「おはよう。動ける？」
「大丈夫だと思うけど……どうしたの？」
「それがまあ……」
吾朗くんは、やれやれ、というふうに肩をすくめてみせる。
「たいしたことじゃないんですけどね、ゆめみちゃんが故障したんです。メモリがちょっと……物理的にリセットしないと復元できない」

@　@　@

運転席にはわたし、助手席には吾朗くんを乗せて、わたしのヴィッツは夜の二俣街道を行く。馬込川を越えると、頭上には遠州鉄道の高架がずっと覆い被さっていて、昼に走りたい道ではないけれど、夜にはヘッドライトがコンクリートを不思議に照ら

して、悪くない雰囲気になる。もっとも、その雰囲気は、わたしの大好きな、夜を満天に煌めく星空とは、まるで違うのだけど。

「これなら、電車より早く着きますね」

「うん。あと十分くらいかな」

「ありがとう。一応急いだ方がいいですから」

「ふうん……」

「バックアップから復元するとなるとラボ行きだし、今だとほぼ一ヶ月、記憶が飛んじゃいますからね」

「……っていうと、花菱（ウチ）に来る前？」

「そうですね、フルバックアップはなかなか」

「大変なんだ、ゆめみちゃん」

「まあまあ。バブルがブローしきる前にハードリセットかければ……明日の朝だとだめですね。今夜中なら大丈夫くらいですけど、きっと」

「よくわからないけど……」

と、遠くの方から、ハイビームらしき車が姿を現した。

「運転に集中、ですね。事故ったら大変ですから」

「そうね。そうするわ」

大変なのはわたしのことなのか、ゆめみちゃんのことなのか……とは思ったけれど、さすがにそれは口にはしなかった。

@　@　@

静岡県浜松市中区鍛冶町
花菱デパート
同日　20時53分

花菱裏の駐車場に車を停めて、通用口から従業員用のエレベーターに乗り込む。警備員さんが、眠そうな目で、

「お疲れさま、ロボットさんが大変なんだって？」

と声をかけてくれた。どうやら、ヤマハの方から連絡が行っているらしい。

最上階まで上がって、非常階段からプラネタリウム館の裏口にあがる。

吾朗くんが鍵を開けて、わたしたちはプラネタリウム館に足を踏み入れる。夜のプラネタリウム館はしーんと静まりかえっていて、なんというか、やっぱり異界だった。

ゆめみちゃんの〈ベッド〉は、主に外部へのプロモーション、の意味で館長室に置

かれていた。館長室のドアを開けて――すぐに気づいた。
〈ベッド〉の頭の上あたりの、いつもなら緑に光っているリングが、赤くなっている。
「フェイタルですねえこれは」
短く吾朗くんが言った。
コンソールに似つかわしくない古びた事務椅子に腰を下ろし、スリープから戻すと、表示されていた黒いウインドウになにかのコマンドを打ち込む。
……ゆめみちゃんはまるで動く気配がない。
ぴっ、と聞き慣れない警告音が鳴った。
「やっぱりだめですね」
吾朗くんは立ち上がり、〈ベッド〉の裏側に手を伸ばす。かちりとスイッチを押す音、ついでなにか、プシュッという音がして、ゆめみちゃんのヘッドギアがすうっと上にはずれた。
「いいの？」
これは、ゆめみちゃんが寝ているときは、下がっていると聞いている。
「緊急ですからね」
吾朗くんはゆめみちゃんのイヤレシーバにキーをかざす。かちゃり、と小さな音がして、ぱかりとなにかのカバーが開く。その中には、小さいコネクタが見える。

同じくコンソールにもキーをかざすと、同じくコネクタと、それから、おそらくはそのコネクタにつなぐのであろうケーブルが見えた。
思った通り、吾朗くんはそのケーブルでコンソールとゆめみちゃんをつなぐ。それからコンソールに、また別のウィンドウを表示させた。
かちゃかちゃとキーを叩きながら、吾朗くんが口を開いた。
「……里美さん、ちょっと、びっくりするかも知れませんよ」
「びっくり？」
それには答えず、吾朗くんはエンターキーを押す。
と。
ういいいいん、とモーターの音がした。
ゆめみちゃんの方を振り返って……わたしは目を剥いた。
ゆめみちゃんの後頭部が、せり上がっていた。まるで、頭皮がはがれるように……
いや、ヘルメットが外れるように。
でも、ゆめみちゃんは何もかぶっていないし、あれはゆめみちゃんの頭なのだ。
その、跳ね上げられた頭の中は……当たり前なのだけれど、なにかの機械でいっぱいだった。
まるでロボットみたいに――
「……ねえ、吾朗くん」

「何です？」
「ゆみめちゃん、ロボットなんだね」
「そりゃそうです」
吾朗くんは、わたしの言葉をさらりと受け流し、ゆめみちゃんの頭の中を覗き込む。
そこには、小さく赤く、なにかのランプが明滅している。
「ブローしていますね」
呟くと、また別のケーブルを取り出し、コンソールと、ゆめみちゃんの……頭をつないだ。
コンソールを叩いて、吾朗くんはつぶやく。
「キャッシュは昨日の夜からですか……里美ちゃん、ゆめみちゃん、一日分の記憶が飛んじゃいますけど、いいですね？」
「え！？　あ、はい」
なぜか敬語になった。
「館長に聞く？　でも、それしかないんだよね」
「ですね」
「それじゃ仕方ないかな。昨日は……、あ、わたしの誕生日の話をしたかな」
吾朗くんの両眉が、すこしだけさがった。
「……残念ですね」

「ま、来年があるわよ、きっと」
わたしがそう言うと、吾朗くんの両眉が今度は上がり、吾朗くんはにっこりと笑った。
それから、なにかしらの呪文をコンソールに打ち込むと、静かにエンターキーを押した。

@　　@　　@

再起動には二時間かかるというので、わたしたちは家に帰ることにした。明日も仕事があった。
「安定起動プロセスに入ってますから。なにか異常があれば連絡入りますし」
そう言って、吾朗くんは端末をひらひらと振ってみせた。
警備員さんに挨拶をしてから裏口をでて、車に乗り込む。
思い出すのは、あの、ゆみめちゃんの頭の中。
みっしりと詰まった機械。
半時間も経っていないはずだけれど、ずいぶんと、なんというか……いろいろな認識が変わってしまったような気がした。
「ゆめみちゃん、やっぱりロボットなんだね」

遠鉄の高架の下を一路我が家に向かって走りながら、わたしはぽつりと呟いた。
「そういえば、さっきもそんなことを言ってましたね」
「さすがに、びっくりしたから」
「たまに、そう思う人もいますね」
車窓の向こうを、街灯が前から後ろへと過ぎてゆく。
「人間っぽく見えますか？　ゆめみちゃんは」
「そうね。そう見える」
「それなら、よかった。ゆめみちゃんの感情プロセッサのチューニング、僕がしたんですよ。いわば情操教育ですね」
「へえ。いい子じゃない」
「そうなるように調整しましたからね。なにしろプラネタリウムですから、あんまりすれてないバランスで」
「へえ」
ちら、と吾朗くんの方を見る。
「そんなことまでできるんだ」
「現場にあわせて、ですよ」
一瞬おいて。
「……惚れちゃう？」

「まさか！」
一笑に付すとは言わないけれど、吾朗くんは言下に答えて見せた。
「ゆめみちゃんはいわば、僕の娘ですよ。そういうのはちょっと、考えられないですね」
「そうかあ……」
すこし、会話が途切れた。
夜である。
道はちょうど二俣街道が遠鉄の高架から外れるところで、吾朗くんはちらと空を見上げた。夜空である。晴れていた。
見上げながら、吾朗くんがふと、口を開いた。
「里美さん、ロボットって何だと思いますか？」
「ロボット？」
言われてみると……そんなことを考えたこともなかった。
「ええと……人……っぽい、機械？」
「そうですね」
にっこりと吾朗くんは笑った。
「まあ、いろいろな観点があるんですが――よく言われるのは、『ロボット』という言葉は、『労働』もしくは『労働者』からきてるっていうことです。英語で労働者って、なんて言いますか？」

「ええと……」
頭の中の単語帳をぱらぱらとめくる。
「たしか、labor(レイバー)」
「そう。そのチェコ語が『ロボット』なんだそうです」
「へえ……」
言われてみれば言葉の響きは似ているし、たしかにゆめみちゃんはウチで『働いている』。
「確かに、労働、なのかも」
「でも、です」
吾朗くんは、なんだか嬉しそうに、ぽつぽつと話す。
「その『ロボット』っていう言葉がでてきた最初の物語、その名も『ロボット』って言うんですけど、そのお話は、どんなオチになっていると思いますか？」
「え？　うーん……たとえば、ロボットの叛乱とか？」
「うんうん。でも、違うんですよ。その『ロボット』の最初の物語は――人間が滅んだ後、残されたふたりのロボットが、新たな時代のアダムとイブになるんです」
「……それは、予想外ね」
「でも、いい話でしょう」
その空を見上げる視線の先に、なにがあるのだろう。

「僕たちが辿りつける場所よりも、あの子達はもっと先に行ける。行けるかも知れない。そう考えたら、なんだか――安心しませんか」
「安心かあ……」
吾朗くんの言葉の意味は、正直よくわからない。
そもそも『僕たちが辿りつける場所』というのが何を指しているのか。
わたしたちの――人類の限界、みたいなものだろうか？
そんなＳＦみたいなことは――
「――よくわからないけど、吾朗くんがなにを考えてるのかは、すこし分かったかも」
「そうですか？」
「そんな気がしただけ」
「ふうん」
何を考えているのか吾朗くんは、それだけを言って、また夜空を見上げた。
その姿は、ずっと昔から、本を読んでは夜空を見上げていた吾朗くんの姿そのままで――わたしはなんだか嬉しくなった。
「かわらないんだなあ」
「そうですかね？」
「そうだよ」
「いいことなのか、悪いことなのか、ですね」

笑いながら、吾朗くんが言った。

そんな風にぽつぽつと言葉を交わしながら、わたしたちは家路を辿る。

ダッシュボードを見ると、時計は十時を回っていた。

こんな時間だけど、吾朗くんはうちから自分の自転車に乗って、自分の部屋に帰るだろう。

確認する必要はなかった。

口に出さずとも、吾朗くんは昔から、そうなのだ。

@　　@　　@

静岡県浜松市中区鍛冶町

花菱デパート屋上プラネタリウム館

２０３４年５月17日（水）７時20分

翌日。

いつもより早く出勤した吾朗くんとわたしは、ゆめみちゃんの〈ベッド〉の枕元に立って、ゆめみちゃんが起きるのを待っていた。

やがて、いつもの〈起床時間〉になり、ゆめみちゃんの体から静音リアクションホイールとバブルメモリの起動音（らしい）が聞こえてきて――やがて、ヘッドギアがゆっくりとあがる。

そして、ゆめみちゃんはその瞳を開いて――

「おはようございます。三ヶ島さん。倉橋さん。今日はお早いんですね」

にっこりと笑った。

吾朗くんは手元のタブレットを眺めて、それから満足げにゆめみちゃんに答える。

「コンディショングリー……おはよう、ゆめみちゃん。調子はどう？」

「？　ハードウェアおよびソフトウェアに、エラー以上および未登録の警告は認められません」

「うん。なによりだ」

その会話を聞きながら、わたしは昨夜の吾朗くんの言葉を思いだす。

『ゆめみちゃんはいわば、僕の娘ですよ』

ああ、そうなんだ――と、今ならわかる気がした。吾朗くんはずっと、こんなふうにして、ゆめみちゃんを育ててきたのだろう。確かにゆめみちゃんは、吾朗くんの娘なのだ。

ならば、わたしがするべきことは何だろう、と自問して――思わずわたしは、笑った。考えるまでもなく、決まっている。

「どうしましたか、里美さん」
「ううん、なんでもない。それより、ゆめみちゃん」
「はい、何でしょう、倉橋さん」
「早く、一人前の解説員にならなきゃね。空いてる時間に、練習してみましょ」
「はい、よろしくお願いします」
ゆめみちゃんは丁寧にお辞儀をしてくれた。その隣で、吾朗くんが驚いたような、嬉しそうな顔をしていた。
そう。ゆめみちゃんはロボットだし、吾朗くんの娘なのかも知れないけれど——花菱デパート屋上プラネタリウム館の解説員であるわたしにとっては、なにより、ゆめみちゃんは同僚であり、新人の後輩なのだから。

（続）

（二〇三八 - 四五）プラネット・デイズ

帰路、夜雨、ポン酢（倉橋里美）

静岡県浜松市東区
さぎの宮駅
２０３８年５月７日（金）18時53分

雨のにおい、というのがある。

浜松は小さな地方都市だけれど、それでも都市は都市だ。それも単なるベッドタウンではなくて、大きな会社や工場だって、いくつかある、工業都市だ。だから、花菱のある鍛冶町が繁華街だから、ということもあるだろうけれど、雨の日はどちらかというと下水道の匂いがする。

でも、仕事を終えて新浜松の駅から遠鉄に乗って、鉄路が高架橋から地上に降りて、馬込川を渡り、東名高速をくぐったあたりから、街の風景は一変する。沿線には田畑

が増え、家々の姿もどことなく田舎じみてくる。そうしてたどり着いた、我が家の最寄りの駅、さぎの宮の駅のホームに降りると、雨の日には——土と草の湿ったにおいがする。

雨の日のにおいがするのだ。

島式ホームの改札を抜けて、地下通路から西口に出る。駅前にはロータリーなんていう洒落たものはない。

傘を差してセブン・イレブンに向かう。ポン酢を切らしているから、ついでに迎えに行くと、母さんから連絡があったのだ。

夜である。

繁華街と違って、街灯は無骨な量産品だ。

その街灯が雨を照らしている。

初春までの雨はさらさらと降るが、梅雨が近づくと雨はしとしとと降る。

冷えた空気で結露しきらない湿気が大気に満ちている。

ぼんやり湿る大気は、しかしかえって肌寒い。

梅雨の季節は体調を崩しがちだ。

セブンの駐車場までくると、見慣れた車が止まっていた。
母さんの車だ。
エンジンはかかっていない。
店内を見ると、ちょうど母さんがレジに並んでいるところだった。
傘をたたみ、雫を払って中に入る。
母さんがこっちに気づいた。買い物かごにポン酢が一本転がっている。
「里美、何か買う物ある？」
「ん……ないかな」
「そう。じゃこれだけね」
「次の方どうぞ」
店員さんに呼ばれて、並んでレジに向かう。
「三百十八円です。袋いりますか？」
「いえ。鞄に入れていきます」
言って財布を取り出す。
「あら、出してくれるの？」
「これくらい……ＴＯＩＣＡでお願いします」
「はい。タッチしてください……ありがとうございました」
レシートを受け取ると、ポン酢を掴む。

母さんが鞄から車のキーを取り出した。
家までは車で五分とかからない。
「ありがとね、迎え」
「どうせ、傘、持って行かなかったでしょ、あなた」
「うん」
しゃこんしゃこんとワイパーが鳴る。
対向車線のヘッドライトが低く雨を切り取っては消えていく。
過ぎ去る両輪が轍の水を巻き上げる、シャアァ……という音もまた、雨の日だけの音だった。
「で、ポン酢何に使うの？」
「お鍋にしようと思ってね。ちょっと寒いでしょう、今日」
「まだだったら、野菜とか切るよ」
「あら。それじゃお願い」
「迎えに来てもらったしね」
たぶん、母さんも仕事が忙しかったんだろうから。
疲れたときは鍋が手軽。
母さんに教わった、たくさんのことのひとつだった。

（続）

サイクリング、灯台、買い出し（三ヶ島吾朗）

静岡県浜松市中区
ミドリアパート前
２０４２年４月26日（土）10時15分

浜名湖サイクリングコースは家から少し離れ過ぎているから、だいたい走るのは天竜川左岸サイクリングコースだ。

助信の家から、少し東のイオンモールの脇の道を、仕事場とは逆、北のさぎの宮まで出て、勝手知ったる裏道を抜けてかささぎ大橋を渡る。そうすると、あとは遠州灘は掛塚灯台まで、片道十五キロ、往復三十キロの一本道である。

サイクリングコースに出るまでの距離を入れれば、計五十キロ。

これをそこそこのペースで走っていたら、ま、通勤の往復五キロはほとんどゼロみたいなものだった。これくらいしないと健康（具体的には体重）をキープできないとも言う。

今年のゴールデンウィークはよく晴れた。

今朝もいい天気だ。
いくつか雲が浮いているくらいの青空だが、わずかに薄雲でも張っているのか、日差しはきつくない。うむ。
チューブの張り具合を確かめて、それから、一通り柔軟で準備体操とする。
「っし」
ハンドルを握り、スタンドを蹴り上げた。
軽やかにタイヤが回りだす。

@　　@　　@

掛塚灯台までは家を出てから一時間強でたどりつく。
海岸沿いに立つ白くて古い灯台だ。
春と夏の端境期、その陽の光を浴びて、少し眩しいくらいに見える。
その隣、少し離れていくつか立っている風力発電の風車が、柔らかな風にゆったりと回っていた。
自転車を停めてチェーンロックをかけて、少しだけ高台になっている灯台の袂に登る。
階段が二十段ちょっと、少し高めの二階くらい。

海が遠くまで見渡せる、水平線が少し丸いような気もする、中学生くらいの頃からお気に入りの場所だった。

いま何時くらいかな……とポーチを探ると、スマホが少し光っている。見るとメッセが届いている。

from:倉橋里美

イオンに行くけど、買い物ある？

車で行くから、買い物が沢山あるなら載せてあげる、ということだ。

そうだな……と生活用品の在庫を思い浮かべてみる。

着信十分と少し前だった。

to:倉橋里美

少し買いたい物があります。ただ、今掛塚灯台で、二時間後くらいでもいいかな。

返信はすぐにきた。

from:倉橋里美

いいよ。汗流してね。

to:倉橋里美
もちろん。よろしくお願いします。

@　　@　　@

五分くらいぶらぶらとしてから、自転車に乗る。
帰りはかささぎ大橋まで戻らないで、旧東海道の天竜川橋から裏道を抜けた。
これで十五分くらいのショートカットになる。
助信駅から徒歩三分の、それなりに年季の入ったアパート、その前に自転車を止めて、階段を上がれば我が家である。
シャワーは水にした。
夜はそうもいかないけれど、この気温でさっと浴びるのは、もう水がいい季節だ。
ともあればさばさと髪を拭いて一息をついたあたりで、スマホがぴぴぴと音を立てた。

from:倉橋里美
こっちはいつでも出られるよ。

to:倉橋里美

あと十分くらいで準備できます。
from:倉橋里美
それくらいだと思った。車出すね。
to:倉橋里美
了解です。
向こうの家からここまで、十五分くらい。
ちょうどいい時間だ。
予定より早いけど、お互い時間が読めてるわけだから、効率がいいわけだ。

（続）

電車、寿退社、簿記（黛ちはや）

愛知県岡崎市
岡崎駅　東海道本線上りホーム
２０４３年５月９日（土）７時11分

愛知環状鉄道（あいかん）の列車を降りて、跨線橋を渡って東海道本線のホームに降りる。

空気はまだ涼しいと言える温度だが、四月と比べると日差しはずいぶん強くなっている気がする。

夏が近づいているのだ。

天井に吊られた発車案内板には、遅延の表示はない。この分なら、いつも通り、八時半には浜松駅に着く。九時の始業時刻には、十分に余裕を持って花菱に着くことができるだろう。

やがてやってきた八両編成の電車から、ばらばらと人が降りていく。岡崎はそれなりの地方都市だ。

入れ替わるように乗り込むと、ぴぽーん、ぴぽーん、とチャイムが鳴ってドアが閉まる。プシュ……という音がして、やがて電車は動き出す。

岡崎からの上り線はいつも空いている。座っていけるのだからいいのだけれど、たまに、普通はしないような通勤をしているのだな、という妙な実感を覚えることがある。

豊田市の我が家から花菱まで、ドアツードアで二時間とすこし。週に三日の非常勤とはいえ、我ながら物好きなことだ。それを許してくれる旦那に感謝というところ

だった。

別に、豊田で別の仕事を見つけようと思えば、見つからなくもない。なにしろ豊田は製造業の町なので、このご時世でも、私のできる仕事はまあまあある。このごろは工場の自動化がどんどん進んで、工場は管理職の仕事場になっているのだ。これでも一応は大学を出ているし、簿記とかＭＯＳの資格があるのは、多少の強みにはなるだろう――これは両方とも、花菱の仕事で必要に迫られて勉強した結果だけれど。

……。

花菱をそう簡単に辞めるわけには行かないだろうな、と思う。

元高校教師で社会人に致命的に向いていない館長。

一見するとクールだが、星のことになったら歯止めがきかない解説主任。

ムードメーカーというよりトラブルメーカーの古賀さんに、天然ボケかつ小動物系の森見さん

根っからのエンジニアの三ヶ島さんにヤンキー上がりの津野さん。

どう考えたって、事務やら経理やらの仕事ができる人々ではない。

二週間の新婚旅行から帰ってきた後の、花菱総務部のお姉様の顔ったらなかった。

「黛さん。あなた寿退社とかダメよ絶対」

「はあ……ダメ、ですか」
お姉様は黙って書類の束を突き出した。
ぺらぺらとめくって……私は珍しくも、苦笑いした。
「……今日中に直します」
「明日でいいわよ……」
心底疲れた、という顔でお姉様は言った。
これまた珍しくも、温情のあるお言葉だ……とあのときは思ったが、そのあとお姉様は、妙に私に優しくなった。
たぶん、私の苦労が透けて見えたのだろう。
書類には何度か訂正のやりとりがあったようにも見えた。
あるいは単に、私に寿退社されてはかなわない、と思ったのかも知れないけれど、どちらにせよ悪くないことだ。

電車は蒲郡にさしかかったところだ。
右手の車窓に見えてくる三河湾からは、夏の気配は感じられない。
浜松はまだまだ遠い。
鞄から簿記のテキストを取り出す。
なにしろ二級は難しい。

まだまだ受かる気がしないのだ。

（続）

フルーツ、クリーム、幸せ（森見由香、古賀茜）

静岡県浜松市中区　ザザシティ浜松
まつもとフルーツ・トレピーニ
２０４４年９月21日（水）14時43分

正面の席では茜ちゃんが満面の笑みで忙しく手を動かしているが、それは羨ましくもあり、わざわざ私につきあってくれる同僚でもあり友人でもある彼女に、もちろん感謝の念はあるのだが……しかし、私には私の流儀がある。

長いスプーンを手にして、目の前のガラスの容器をしかと見る。アイスにシャーベット、ヨーグルトにゼリーに季節の果物、そして生クリームがたっぷり盛られた、そのすらっとした細身の姿。

それはまさに、スイーツの女王、言わずと知れたフルーツパフェである。

そして、そのグラスに所狭しと盛られているのは――あまりよく知られてはいない

ものの、みかんに匹敵する静岡の名産であるところの――他でもない、これもまたフルーツの女王であるメロンだったのだ。

そっとフォークを持ち上げ、もう片方の手でパフェグラスをしっかりと持つ。掌が湿ってひんやり冷たい。

それから、一番とりやすそうなメロンに、そろそろとフォークを突き刺した。そこからほんのすこし、果汁が染み出す。

そっと持ち上げると、メロンの下の方には、生クリームが僅かについている。

フォークがしっかりと刺さっていることを確認してから、そこにかぶりついた。

歯ごたえがありながらも柔らかく、じんわりと噛み切れる感触。

果汁の僅かに苦い、しかし風格と威厳のある甘み。

それを、ささやかな生クリームのシンプルかつ確実な甘みがコーティングしているのだ。

はあ。

メロンをゆっくりとのみ込むと、わたしは深く深く息を吐いた。

こういうのが幸せというのだろう。

しかも、私の右手のフォークには、まだメロンのかけらの半分が残っている。

さらにグラスには、まだまだたくさんのメロンが盛られているのだ。
こんなにたくさんの幸せを、どうやったら消化できるのか、ちょっとわからない。
と、正面の茜ちゃんが、ちらりとこちらを見た。
茜ちゃんのパフェグラスは、もうすっかりカラになっていた。
十五種類ものフルーツが乗っている、看板メニュー、トレピーニパフェだったグラスだ。
でも、もちろん、そんなにたくさんの種類のフルーツが乗っているのだから、たとえば季節のフルーツ、メロンがたくさん乗っているかというと、そういうわけではなくて……
「茜ちゃん、メロン、食べる？」
「ほんとっ、いいの！？」
「うん」
「ありがとうっ！　実は期待してた！」
「あはは……いつものことだしね」
「ほんとありがとっ！　いただきます！」
私のグラスに遠慮なく（でもフルーツを落とさないようにしっかりと注意を払って）

茜ちゃんのフォークが伸ばされた。
その満面の笑顔を見ていると、なんだか私まで幸せな気持ちになってくる。
いつだったか、黛さんに言われたことがある。
『森見さんは、もっと自分の幸せのことを考えた方がいいと思いますよ』
その言葉にどう答えたかは覚えていないけれど、目の前の茜ちゃんの顔を見ていれば、わたしはそれはそれで結構、幸せだなあと思ってしまうのだ。

（続）

花見て一杯、星見て一杯（三ヶ島吾朗、倉橋里美、ほしのゆめみ）

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４５年４月４日（火）12時37分

「お花見ですか？」
――と、彼女は首を傾げて言った。それこそ、花でも咲いたかのような笑顔である。
彼女は、自らの言葉に全く疑いを持たない――いや、傲慢とかじゃなく――その、無垢とも言うべき口調で、続けた。

「お花でしたら、一階の生花売場でおもとめになれます。お電話しますか？」
……倉橋さんが、右手で顔を覆った。
「えーとね、ゆめみちゃん」
こめかみを親指でぐりぐりしながら、この子にどっから説明すりゃいいんだと言わんばかりの口調である。
「お花見っていうのはね。花を買ってくるんじゃないの。ほら、見て」
窓の外に視線を向けた。
ゆめみがそれを追って。
「ああ！」
僕たちのプラネタリウムは、花菱デパートの屋上にある。
これでも浜松ではかなり高い方の建物で（まあ、アクトタワーは例外として）、窓の外には、遠い山並みもそこそこ見える。
山々は――桜色に染まっていた。
染まっているというか、そのもの。
季節は、春。
桜が咲いているのだ。
「あれを伐ってくるんですね！」

「ちゃうわ！」

@　@　@

プラネタリウムは、昼の仕事である。
子供連れの家族が主な顧客層である……というものあるが、そもそも夜なら空を見上げればいいだけの話だ。
星は、そこにあるのだから。
もちろん、倉橋さんをはじめとする解説員や、星座の絵図、スライドショーに映像と、プラネタリウムでしかできないことは、ある。
が、そこに本物の星があるなら、見上げるべきだ――というのが、概ねここのスタッフの見解だった。
なので、見上げにきたのである。

@　@　@

静岡県浜松市中区
浜松城公園

同日　19時45分

「とっても綺麗ですね！」
「ふふ、ゆめみちゃん、さっきからそればっかり」
「とっても綺麗ですから！」
美意識ユニット群はまだまだ改良の余地がありそうだな、と思いながら、ちらちらと缶に口をつける。
カクテルパートナーのスクリュードライバーだ。酒はあまり強くない。
ゆめみの隣でご機嫌な倉橋さんは、圧倒的に日本酒だった。
自前で一升瓶を持ってきたあたりで諦めた。
まあ、いいんじゃないかな。
ゆめみは完全防水だから、日本シリーズのビールかけだって耐えられるのだ。
コンパニオン・ロボットの仕様は伊達じゃない。

ともあれ、あれはほっといてもいいなと思ったので、空を見上げた。
星々――だけではない。桜の花がそこにある。
花見の時期だけ設置される臨時照明に照らされて、いくらか橙がかっているのが実に花見である。

満開にはすこし届かないが、来週末はもう満開を通り越しているかも知れないので、公園は（浜松なりの）大賑わいだ。
夜桜の下の宴会。
見ているだけで、実に風情があるものだ。
カクテル缶の半分で、ほろ酔いになった頭は、妙に寛容だった。
楽しそうに浮かれている人々が、実にほほえましい。
世はすべて事もなし、とどっかのアニメのフレーズが頭をよぎる。

@　@　@

「よッ！　館長遠慮せずにグッと！」
「ははは……」
館長が、苦笑いしながら、ちびちびとやっていたお猪口を空にした。
「館長はお酒がお強いんですね！」
「ゆめみくん、君はアルハラという単語を知っているかね？」
あ、どうだろう。
「こら館長、ゆめみに余計なことを教えないでください！」
いやいや。今のは倉橋さんが悪いだろ。

「申し訳ありません、セントラルデータベースに接続しますか？」
「いや、知らないならいいんだ」
「ですよね！」
「そうですか……？」
ローカルＤＢとセントラルＤＢが連動していないのが個性である。
そもそも、業務用のＤＢなんかと違って、情報はニューラルプロセッサの結線で表現されるから、単純な連動にならないのだけど。
それは、学習というべきプロセスで、本質的には人間と同じものなのだ。

@　@　@

ローカルＤＢとセントラルＤＢを分離したのは、本当に、そのほうが個性が出る、というのが根本的な理由だった。
ニューラルプロセッサを実装した研究者が、昔、セントラルＤＢとのリアルタイム同期の有無を比較検討したんだそうだ。
セクレタリ・ロボットなら、もちろんリアルタイム同期が喜ばれたけれど、コンパニオン・ロボットはそうじゃない――と、その研究者は言っていた。
まあ、ゆめみを見るかぎり、判断は正しかっだのだと思う。

ロボットをその観点で評価することの良し悪しは判らないが、ともかくゆめみには個性があっていいと思う。
ウチのスタッフのかわいがりようを見れば、そうも思うようになる。
昔は、そうじゃなかったかも知れない。
あんまり覚えていないのだ。

@　@　@

あんまり覚えてないから、とりあえず星空を見上げた。
桜のあいだから、獅子座が見えた。
春の大三角、と思ったが、アークトゥルスとスピカは隠れて見えない。
隠しているのが桜だから、仕方がなかった。

――星の世界は、やっぱ遠いなあ。
なにしろ、最も地球から近い天体――月でさえ、人類は半世紀もご無沙汰なのだ。
結局人間ってのは、この地上で生きるように設計されているのだろう、と思う。
だからロボット……とか言うと、よくあるシンギュラリティ（特異点）もののＳＦになってしまうけれど、あながちそれも嘘じゃないな、といちロボット技術者としては考えるのである。

そういう目的であれば、（レイテンシの問題はあるにせよ）ＤＢは同期しといたほうがいいんだろうな。
と、視界の端で、ゆめみがものすごい勢いで謝っているのを見ながら、思った。
どうやら、倉橋さんのスカートに日本酒をこぼしたのだ。
やられた倉橋さんは鷹揚である。
酔っているし、そもそもあんだけ呑んだらこぼすもこぼさないも日本酒くさいだろう。
とは言わないけれど。僕だって命は惜しい。
まあ、倉橋さんはおいといて……なにしろ、星間宇宙でドジ踏まれたらたまらない。
そこは精緻にやっといたほうがいいだろうな――
と、己の思考に違和感。
なんだろうな。
ちょっと脳内ログをトレースしてみる。
例外があるっぽい。
それをちょっと読んで、
「ああ……」

小さく声がでた。
なるほどな、と納得もした。
僕は、ゆめみにこそ、宇宙に行って欲しいのだ。
冷静で効率的なロボットではなく、ひどく――人間くさい、ゆめみにこそ。
さっきのシンギュラリティ（特異点）の話をすれば、たぶん、ゆめみなら、人を継ぐものになれる。
僕は多分そう思っているのだろう。
なるほど、と腑に落ちた。
たまにはお酒も呑んでみるものだ。
新しい発見がある。
そう言う意味では、桜に感謝だった。
星空の下で酒を呑む、というのは、なかなかこの季節くらいのものだから。

@　@　@

「そこなに浸ってるの吾朗くん！」

……どうやら、解説員閣下のお呼びである。
隣でゆめみが笑顔だった。
やれやれ。
せっかくいろいろ仮説が捗りそうだったのだけれど。
が、まあ確かに――ひとりで浸るなら、ひとりで来ればいいのだ。
せっかく皆がいるのだから、皆で呑めばよい。
「今行きますよ」
立ち上がって、ぱっとズボンを払う。
ふと見れば、桜の花が間近だ。
その向こうに、星空。
うむ、よきかな。
ただ、それだけである。
そして夜風ががびゅうと吹き。
コートの襟を少ししめて。
それからやっぱり――もうすこし酔ってみようかなと。
珍しくも、そんなことを思った。

（続）

（二〇四八）花菱プラネタリウム異状なし

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４８年11月７日（水）15時03分

「でも、ソカイですかー。なんだか信じられませんねー……」
古賀さんがひどく現実感のない声で言うと、正面に座っている森見さんが何か考えるようにして顔を上げた。
「わたしも、考えた方がいいのかなあ」
「そうかもねー……由香はどこだっけ？」
「わたしは藤枝」
「それじゃ、通おうと思ったら通えるね。浜松より安全だと思うしー」
「うーん、毎日通うには遠いけどね。一時間半だと、無理。茜ちゃんは？」
「あたしもカズくんもずっと浜松の町中」
「あはは……」

ごく自然に彼氏の名前を出した古賀さんに、森見さんは、困ったように苦笑いした。
最近の古賀さんはだいたいこんな感じなのである。一方の森見さんにはさっぱり浮いた話しがないが、おっとりのんびりしている性格通り、特に急ぐ気はないらしい。
ともあれ――疎開、である。
話題の発端というか、元凶であるところの吾朗くんが、口を開く。
「ま、東京はともかく、浜松がいきなり狙われる可能性はそんなに高くないと思いますよ。基地もありますし、工業都市ですけど、さすがに関東地方にはかなわない」
「ですかねー……」
古賀さんはそれでも、心配そうに言葉を濁した。

@　@　@

この時間は、ちょうどゆめみちゃんが解説をする回だった。
事務室の片隅のディスプレイには、すらりと解説をするゆめみちゃんの姿が映っていて、今し方わたしたちがしていた会話とは、まるで別世界のように見えた。
別世界というのは、ふたつの意味で、全くその通りだった。
ひとつは、プラネタリウムが夢を見せる場所である、という意味において。
そしてもうひとつは、ゆめみちゃんの蓄積データベースの状況は、もうこの十四年

間更新されておらず、まだ人々が深刻な対立をはじめる前の世界、まだ人々が星空に夢を抱いていた頃の世界が、たしかにゆめみちゃんの中にはある、という意味において。

@　@　@

「ゆめみちゃんが戻ってきたら、この話しはなににしましょう」

吾朗くんがそう言うと、みんなはそれぞれに、黙って頷いた。

この場所は、それでもまだ、人々に夢を見せる場所でなければならない。そして、ゆめみちゃんはこのプラネタリウムの神託の巫女だ。彼女に余計なことを教えようとするものは、この場所にはいなかった。

もっとも、蓄積データベースの更新が外部物理メディアに限定されているから、なにか話をしたからと言って、ゆめみちゃんの蓄積データベースが更新されることはないわけだけれど。

@　@　@

静岡県浜松市東区大瀬町
倉橋家
２０４８年11月８日（木）12時47分

翌日。

ぴんぽーん、と玄関のチャイムが鳴り、

「里美ー、吾朗くんよー」

お母さんがわたしを呼んだ。

「今行くー」

言葉を返してから、読んでいた文庫本を伏せて置いて、布団から立ち上がる。

準備してあった鞄とコートを持って玄関に向かう。今日は一日曇り空で、かなり冷え込むということだった。

「おはよ、吾朗くん」

「はい。今日はありがとうございます」

「いいのよ。いつものことじゃない。道具は車に積んであるから」

「さすが手際がいいですね」

「準備は仕事の基本だからね」

いいながら二人で玄関を出る。

「それじゃ、いってきまーす」

言うと、遠くからお母さんが、いってらっしゃい、と言ってくれた。

車と言っても、目的地――むかしの吾朗くんの家までは、歩いて五分だ。
掃除道具を積んでいるから車だけど、小さい頃――吾朗くんが高校にあがって、東京に引っ越すまでは、近所の一番の遊び友達だった。
遊び友達と言っても、小学生の頃の五歳上だから、まあ、ほとんど一方的に遊んでもらっていたということにはなるけれど。

@　@　@

ぶるん、と音がしてエンジンを切ると、三々五々に（二人だけど）車を降りる。
バックドアを開け、バケツやら箒やらを取り出す。
バケツには洗剤やらぞうきんやらが山積みで、歩いて持って行くには少しばかり重い。
もっとも、これを車で運ぶのは田舎の感覚なのかも知れない。

@　@　@

静岡県浜松市東区大瀬町
三ヶ島家
同日　12時54分

「変わりないですね」
家を一通り見て回り、吾朗くんが言った。
吾朗くん一家が中学生まで住んでいたこの家は、それ以来、空き家だ。
ご両親は、お父さんの仕事の都合でずっと東京だし、吾朗くんは助信のアパートだ。
「夏以来？」
「そうですね。お盆以来です」
「それじゃ、さっそくやりますか」
二本の箒のひとつを吾朗くんに押しつけると、よし、と気合いを入れ直す。

@　@　@

まずは物干し竿に布団を干し、布団たたきで埃を落とす。
それから、箒とちりとりでざっと掃き掃除をしてから、濡れ雑巾で床やら棚やらを拭いていく。
拭き掃除用の洗剤が、こういうときにはありがたい。
そこまで広くはないけれど、吾朗くん一家が住んでいた家だ。
一応人が住めるように、となると、それなりに時間がかかる。
吾朗くんは自分の部屋とご両親の部屋、わたしは居間とキッチンと玄関と。

分担しつつ黙々と進める。

そのあいだもずっと、脳裏に浮かんでいるのは、「疎開」という聞き慣れない単語だ。

その「疎開」というのは、もちろん、東京に住んでいる吾朗くんのご両親の、この浜松郊外の家への疎開のことなのだが――東京のほうでは、本当にそんな話が出ているのだろうか。

どうにも、うまく想像できなかった。

もちろん、ニュースなんかではそういう話があるのは知ってはいるけれど、町の人々がそんな話を――声を交わしているというのは、なかなか容易には信じられない。

本当に、戦争が始まるのだろうか。

そんな噂はこれまでも何度かあったけれど、今度こそ危ない――というのだろうか。

わたしは首を振った。

判らないことは、判らない。考えていても仕方がないだろう。

ただ――吾朗くんのご両親が帰ってくるとしたら、吾朗くんにとっては悪いことではあるまい。

その準備をしておくというなら、わたしにとっても異存はなかった。

@　@　@

一通りの掃除を終えると、そろそろ空が暗くなりつつある時間だった。
ぴかぴかの居間の卓袱台に座って、ペットボトルのお茶をちびちびと飲む。
「ありがとうございます、里美さん」
「どういたしまして。このくらいなんでもないわよ」
とは言いつつ、結構疲れはしたけれど。
「せっかくだから、夕飯、どこかで食べますか？」
「あ、それね、お母さんが吾朗くんもどうぞって」
「……お世話になってばかりですね、僕」
「いいんじゃない？　小さい頃はずいぶん遊んでもらったし、今もゆめみちゃんのメンテはお世話になりっぱなしだし」
「そりゃ、仕事ですからね」
吾朗くんはそういうが、技術者としては、小さなプラネタリウムでずっと古いロボットの面倒を見ているのは、必ずしも楽しいことではないだろう。
もちろん、吾朗くんだってメリットがあってそれを選んでいるわけだけれど、感謝くらい、してもいいと思っている。
「……それじゃさ、すこしドライブしようよ。夕飯までまだしばらくあるし」
「いいですけど、どこに行くんです？」
「ちょっとね」

わたしは言葉を濁して立ち上がる。
吾朗くんは何も言わずに、わたしにあわせるようにして腰を上げた。

@　@　@

静岡県浜松市北区引佐町
正眼寺
同日　16時42分

吾朗くんは、引佐のおばあちゃんのところに行くのだと思っていただろうが、おそらくは吾朗くんが予測していなかったであろう辻を右に曲がると、おや、という顔をしてナビをのぞき込んだ。
そして、その行く手――山際にあるものが何なのか、知ったのだろう。
はっとしたような、虚を突かれたような顔をした。
駐車場に車を停めて、外に出る。
「ごめんね」
「いえ……いいですよ。お参りしたい気分でしたか？」
「そうね。なんとなく……月命日だったから」

「そうだったんですか」
言われて吾朗くんは、山門を見上げた。
お寺、である。
わたしの父が――今は眠っているお寺、だった。
黙祷を終えても、わたしはしばらく、そのお墓の前でしゃがみ込んでいた。
「……何年でしたっけ」
「わたしが高校生の頃だから、もう二十年近いわね」
「もう、そんなに経つんですね……」
「吾朗くんは大学院生の頃だよね。ごめんね、あの時は。忙しかったはずなのに」
「学校より里美さんの方が大切ですよ」
その言葉に嘘がないのを、わたしは知っている。
研究室で忙しいのに、しばらくわたしの家で、わたしの話を聞いていてくれたのだ。
折しも、高校の地学部天文班の文化祭で、手作りのプラネタリウムを進めなければならない頃だった。
大学で天文研究会にいた吾朗くんが、いろいろ手伝ってくれたのだ。
やるべきことがあるのは、気が紛れる。
吾朗くんのおかげで、なんとか――わたしは、乗り切ることができたのだ。

「……ありがと」
わたしはそっと呟いた。
きっと、吾朗くんの耳には届いただろうと思う。
と――そのとき、
「あ、」
吾朗くんが、小さく声をあげた。
振り向くと、吾朗くんは空を見上げていて――その空には、ちらちらと白いものが――舞っていた。
「早いですね。まだ十一月のはじめなのに」
「そうだね……」
そのとき――ひゅう、と風が吹いた。
冷たい風だった。
言葉もなく、わたしたちは、ただただ空を見上げていた。
豊穣の季節は過ぎ去ってしまった。

そして、あまりにも早く――冬はやってきたのだ。

@　@　@

雪がちらつくなか、わたしたちは車に戻り、我が家へと向かう帰路についた。
もちろん、運転はわたしだった。
井伊谷を出る頃、吾朗くんが、ぽつりと訊いた。
「お父さんに、何を話したんですか？」
「いろいろとね……吾朗くんのお父さんとお母さんが帰ってくるかも知れないとか、家の掃除を手伝ったりとか」
「今日の報告っぽいですね、それ」
「そうね……それと」
言葉が、一瞬途切れた。
「どうして、こうなっちゃったのかなって」
それだけで、吾朗くんは、わたしの言いたいことを判ってくれたみたいだった。
「……最近ずっと、そんな顔してますね」
「そうかな。そう見えるかな」
「たまに。気づかれていないとは思いますけど」

「吾朗くんには判っちゃったみたいだけど」
「長いつきあいですからね。それくらいは」
「そっか。ありがと」
「……ほんと、なんでなんでしょうね」
吾朗くんが、ぽつりと言った。
返す言葉もない。
わたしたちのプラネタリウム館ができた頃――人類の未来は、とても明るかった。
そのように思えていたと思う。
それから十六年が経って、世界はずいぶんと変わってしまった。
気象変動や食糧不足や――戦争の噂で、世界はほんとうに暗い影に覆われてしまっている。
今や誰も、宇宙のことなんて口にしない。
そんなことをしているのは、ごく一部の変わり者――たとえばわたしたちのような――だけだった。
「お父さんが見たら、なんて言うかな」
「そうですねえ……」
吾朗くんは、なにか考えるように空を見上げるようにした。
それから、ふとにっこりと笑って、言った。

「頑張ってるな、って言うんじゃないですか」
その言葉が予想外で、わたしはちょっとびっくりしてしまった。
「……わたしに？」
「そう。里美さんは、まっすぐに頑張っています。こんな世界ですけど――そのなかで、里美さんはちゃんと『星の人』でい続けている」
「……できてるかなあ」
最近は、プラネタリウムの経営に頭を悩ませるばかりの日々なのだ。そういう――『星の人』とは、ほど遠い生き方をしてしまっている。
そんな気がする。
「大丈夫ですよ。里美さんは。僕が保証します」
「それは心強いなあ」
わたしは、小さく笑った。
そうだ。
吾朗くんはいつも、わたしのことをこうやって見てくれている。
だから、
「……できることをするしかない、わね」
「そう。できないことを考えても、仕方がない。だから、僕たちができることをしましょう。僕たちには、できることがまだ、あるはずだから」

「そうね」
そう考えると、すこしだけ気が楽になった。
この世界の片隅で、わたしはわたしのできることをする。
結局のところ、そうするしかないし、それをやめてしまっては――それこそ、何にもならない。
「明日からまた、頑張らなきゃね」
「そうですね。大丈夫、僕たちはいつもどおりやるだけですよ」
「うん。でも、その前に――」
わたしは、助手席の方に、左の親指を立てて、言った。
「――夕飯食べて、元気つけていきましょ。そろそろお母さんが、待ちくたびれてる頃だと思うから」
「ご相伴にあずかりますよ」
吾朗くんも、ちいさく親指を立てて、わたしたちはにっこりと笑ったのだ。

（続）

（二〇三一・回想）プロローグ　その２

静岡県浜松市中区
浜松北高校　屋上
２０３１年11月25日（火）17時10分

見晴らしがいいところは、我が浜松北高校のいいところのひとつだ。
あるいはこの見晴らしの良さが、闊達な校風の源のひとつなのかも知れないと思う。
放課後、太陽は少し前に西の空に沈み、東の空には星が出つつある。
南東の低いところに、フォマルハウトが輝いていた。
『プラネタリウムの館長をやってくれないかね』
その言葉の意味を理解するのに、しばらくかかった。
応接室、目の前に座っている身なりのいい老人は、花菱のオーナーだという。
冗談ではないですね、と問い返すと、彼は、もちろん、と頷いた。

失礼ながら、と断り、ウェブから電話番号を調べ、花菱本店から問い合わせると、確かにオーナー氏は、今日、我が浜松北高校にやってくる予定があるという。
冗談ではないのだ、と理解すると、すっと肝が冷えた。
『急がなくていいから、答えがほしい』
彼はそう言って去って行った。
ふわふわとする頭のまま、私は屋上に出てきたのだ。
――教師を辞めて、プラネタリウムの館長？
とても、まともな人間のすることじゃない。
三十代の独身ならともかく、四十も回って、妻子もいる身なのだ。酸いも甘いも多少は嗅ぎ分け、世間の風の冷たさも知っている。それでもなんとか、この仕事で食いつないできたのだ。そうして生きてきた。生きるために働いてきたのだ。
だが――
空はだんだんと暗くなっていく。
星の世界が、今夜も始まる。

北西にカペラ、やがて天頂に、デネブ、ベガ、アルタイル……その星空にあわせるように、頭の中に、解説が流れていく。

今日も一日が終わり、太陽が西の空に沈んでいきます。そして夜の帳が降りていき、空には、満天の――

「先生！」

はっと、その言葉に我に返った。振り返ると、そこにいたのは、顧問をしている地学部天文班の三年生、倉橋里美だった。

「何だ、倉橋か、どうかした……」

「話は聞きました」

倉橋は私の言葉を遮った。

「ああ……」

何の話なのか、聞くまでもない。嫌な予感がした。倉橋は、天文班の中でも、特に……重篤な生徒だった。

「お願いがあります」

「お願い？」

なんだかわからない嫌な予感が急速に頭の中で膨張していく。

「はい。先生、私を――」
倉橋は、完全に真顔だった。そして、その真顔のまま――
「私を、花菱のプラネタリウムで雇って下さい」
――そう、倉橋は言い切ったのだ。

（続）

（二〇四九）プロローグ　その3

静岡県浜松市中区
花菱デパート　屋上
２０４９年６月18日（金）20時37分

@　　@　　@

屋上から見おろす浜松の夜は、今日も暗かった。
大都市圏への一極集中のおかげで、この町は半世紀もの間、寂れていく一方だ。
おまけに、今年のはじめ頃から原油の輸入がストップしているおかげで、この時間になると町の街灯も消える。
隣家に遠慮してか、家々の明かりもまた、カーテンにしっかりと遮られていた。
ただ、浜松唯一の高層建築物であるアクトシティのてっぺんには、真っ赤な航空障害灯が明滅していて、それだけが、まだこの町は生きているということの証明だった。

@　　@　　@

もっとも、そんな夜も、わたしには――いや、わたしたちにとっては悪いものではない。

「問題なしですね」

吾朗くんが天体望遠鏡から目を離して、淡々と言う。

淡々としているが、満足の声だ。

今日は、本当に珍しく、よく晴れた夜だった。

だから、来月の七夕観望会に備えての予行演習――そういう名目をつけて、わたしたちはただ星を眺めている。

今の時代、松菱デパートの屋上からでも、星は十分に見える。それに、町の子供たちを呼んで、本物の星空を見せるには、家に近いほうがいい。やっぱり、山奥にいくとなれば、それなりに理解のある親御さんでないとキビシイのだ。

こんなご時世だからこそ、いろいろな子供たちに星を見てほしい。みんな、自分のことばかりしか考えないような世の中だけど、世界は思っているよりもずっと広いのだ、と。

そんなことを、少しでも感じて欲しかった。

もう六月も後半だというのに、今夜もどうにも肌寒かった。異常気象、と一言に片づけるには、この二、三年の寒冷化の具合はひどすぎるような気もする。

あるいは人々は、誰かが気象兵器を使ったのだとかの噂もするが、そんな莫大なエネルギーのものがあるとはにわかには信じがたいし、なにより、もしそんなものが実在したとしても、気象は地球の全球的な現象だ。自分の首を絞めることになるわけで、そんな愚かな人間などさすがにいないだろうと思いたい。

それに、悪いことばかりでじゃない。

少し肌寒いくらいの空のほうが天体観測には向いている。いつも通りの六月だったら、空もきっともっとじめじめとしていて、星々はゆらゆらと大気の熱にゆらめいているだろう。

それを思うと、今のこの空は、なんだかありがたいような気もしてくるから不思議だ。

うん、確かに悪くない。

わたしはひとつ、よし、と頷く。

@ @ @

「吾朗くん、ちょっと見せて」
「はいはい」
わたしは場所を変わってもらうと、望遠鏡をぐるりと動かす。
「何を見るんです？」
「月」
「好きですねえ、月」
「いいじゃない。好きなんだから」
吾朗くんはそれには答えず、マットに寝転がった。
それを横目に眺めつつ、わたしは月を照準に入れる。
今日の月齢は、十七。三日前の満月には及ばないけれど、でも、いい月だ。
ちょうど月末が新月で、七夕の夜は上弦の月。満月よりは天体観測向きだし、観望会の時間帯には、ちょうど月か空にある。子供たちは喜ぶだろう。
七夕ではあるが、織姫と彦星よりも、お月様を見たいという子も少なくない。そういう子は、得てして理系の素質がある場合が多い。宇宙往還機とか、月面基地とか、月面多脚戦車とか、そういうものに憧れている子たちなのだ。

本当は、そういう子こそ、もっと遠い星のことも知って欲しい。外惑星や、あるいはもっと遠い星々に目を向けて欲しい。目の前にあるものだけが世界なんじゃない。ほんとうはもっと、世界は広いのだ――、と。

そんなことを考えながら、望遠鏡の月を眺めて――

ぴかり、

「……？」

突然、なにかが光った。

月の東側の、ちょうど光の境界線のすぐ影の側、そのあたりに、今まで見たこともない鋭い閃光が走っていた。

まるでなにかが――爆発でもしたかのようだ。

「なに、これ……？」

ごそりと吾朗くんが起き上がった。

「どうしたんです？」

「それが……」
黙って場所を譲ると、吾朗くんはそっと望遠鏡を覗き込む。
一瞬あって。
「なんだ、これ」
吾朗くんはなにかを呟くと、望遠鏡から目を離す。
わたしはもういちどそれを覗き込む。
閃光は、より一層激しくなって、しかも、なにか――ちりちりと瞬いているようだ。
――突然、得体の知れない不安に駆られた。
吾朗くんのほうをちらりと伺うと、どうやら手元でなにか調べ物をしている。
「見て」
こちらに映像が送られてきた。
月面地図だ。
吾朗くんが、その一点を指さした。
第二月面港（マレ・ネクタリス）。

「まさか……」

吾朗くんが望遠鏡を覗き込んで、呟いた。

「間違いない。第二月面港（マレ・ネクタリス）だ」

三十八万キロメートルの距離を越える光。

それも、月の光をものともせずに瞬くそれ。

考え得ることは――

「なに……事故……？」

「どうでしょうね」

吾朗くんは、望遠鏡を覗き込んだまま答えてくれた。

ひどく乾いた声だった。

「色々きな臭い話も、聞こえてきてますから、あるいは、もしかしたら、そんな生やさしいものじゃなくて――」

言葉尻が、消えた。

でも、それで十分だった。
ニュースの映像が脳裏を過ぎる。
町ゆく人々の昏い目。
どこか遠い国の、武装集団の熱気、殺気。
各国指導者の、威勢ばかりのいい声、声、声。
彼らが大声でまくし立てる言葉に、うっすらと誰もが予感していること。
戦争が、はじまったのだ。
そしてこのとき、わたしは――ぼんやりと理解してしまっていたのだろう。
この戦争は、すぐには終わらない。
いや、それどころか、人類は――わたしたちは――きっと、もう二度と後戻りの出来ない場所へと、決定的に足を踏み込んでしまったのかも知れない――と。

（続）

（二〇四九）断章

1.

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４９年８月８日（月）８時54分

「まだ、理性、残ってんスね……」
まるで自分の言葉を信じられていないような顔で――津野君が呟いた。
その、津野君のいう理性というのが、どの程度理性的なのかは知らないけれど、とにかく自由連邦軍は核兵器を使いはしなかった。
南ヨーロッパを占拠した人類解放軍が、孤立したバチカンに立て籠もる自由連邦軍を圧殺し、バチカンの宗教施設を破壊したのが、一昨日。
あるいは――人類解放軍は、それがどんなに危険な引き金だったのか、十分に理解していなかったのかも知れない。
だから、現地時間で昨日の夕方、日本時間で昨日の深夜、人類解放軍の各都市に戦

略生化学兵器が落とされたあと、人類解放軍のスポークスパーソンは――彼女にしては全く珍しく――冷静さを失っているように見えた。

自由同盟軍は、ルビコン川を渡った、と……

「理性なんかじゃないですよ」黛女史が冷たく応えた。「アメリカ本土だったら、確実に核の撃ち合いになっています。自分ごとじゃないってだけですよ、彼等には」

「そんな……！」

森見さんが悲鳴じみた声を上げ、古賀さんの服の裾をぎゅっと掴んだ。

「でも、もしそうなっても、《タカアシガニ》が……」

ちらり、と黛女史が窓の外に視線をやった。自衛隊の戦略弾道兵器防衛システムの砲撃端末、通称《タカアシガニ》が、その名の通りの奇怪な姿で、道路に鎮座している。

「ミサイル防衛システムの迎撃率は百パーセントじゃありませんよ。それに、相手が本気になったら、ミサイルは、同時に無数にやってくる。すべてに同時に対応するのは、不可能ですね」

「気休めってことっスね、あれは」

森見さんが絶句した。

「なんで……」

森見さんのその言葉は、きっと、ここにいる全員の代弁に違いなかった。

「とにかく」

私は、ちらりと吾朗くんに視線をやる。自由連邦軍の戦略生化学攻撃のニュースを聞いてから、吾朗くんはなぜだか、一言も言葉を発しない。

「私たちは、私たちのできることをしましょう。炊き出しの準備、ね」

と、黛女史が付け加える。

「それに、特別投影の準備ですね」

そう言って彼女は、皆の顔を見回した。古賀さんに森見さん、津野君……それぞれに、頷いている。

「他のことは分担してやりますから、主任はまず、特別投影をお願いします」

「……うん、ありがとう」

私は小さく頷いた。

「はい」

黛女史は珍しく、にこり、と微笑んだ。

「わたしたちの分まで、お願いしますよ！」

古賀さんがぎこちなくも茶化すと、皆が笑った。

ただ——吾朗くんだけは、ひどく遠い目をして、窓の外を見ていた。なにか……なにか思い詰めた表情のような気がして、ぞくりと、背筋が冷たくなった気がした。

@　@　@

朝のミーティングが終わると、私は、特別投影のスライドに使える絵を探すために――著作権的にはＮＧだが、どこかに発注、などとしている余裕はなかった――資料を机に積んではめくっていた。

資料を一冊眺め終えた頃、かたり、とドアが開く音がした。私が入口を振り返ると、入ってきたのは上着を抱えた吾朗くんだった。

ひどく表情が硬い。

一瞬、声をかけるのをためらった。

それを察したか、吾朗くんはわずかに頷いた。

それから、定位置――私の斜め前の机に腰掛けた。

吾朗くんの机はディスプレイが３つも置いてあって、その影に隠れて、表情が分からない。

「――東京に電話してきました」

「……お父さんとお母さん？」

「はい。荷物なんかいいから、早くこっちに戻ってくるべきだって……」

「それで……」

「明日には、って……」

それで、ほっとしたらいいのか、焦ればいいのか、私には、わからなかった。

「できるだけ早く、急いで、って、伝えたんですが」

「うん」
吾朗くんが、ひどく深いため息をつくのが、わかった。
「倉橋さんも、急いでください。時間はそんなにないかも知れない」
「……うん」
その、時間がないかも知れない、ということの本当の意味は、私はもしかしたら、想像しないようにしたのかも知れなかった。
ただ、吾朗くんの言うことは、きっと本当なんだろうな……と、漠然と理解した。
それしか、できなかったのだ。
一瞬、沈黙が降りた。そして、
「すこし、館長と話してきます」
そう言って、吾朗くんは立ち上がった。
「あ……」
「大丈夫ですよ、僕たちは、僕たちにできることを、です」
吾朗くんは微笑んだが、その瞳の奥に、奇妙な緊張を見て取って、私は何も言えなくなってしまった。

@　@　@

2.

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４９年８月９日（月）11時14分

東京都心部を直撃した核爆弾は、そのまま東京をまるごと消滅させてしまったそうだ。

東京がまるごと、消滅、ということが、一体どういうことなのか、最初、私にはよく分からなかった。

だから、私たちが――少なくとも私が状況を理解したのは、「消滅」の数時間後、上空のヘリコプターからのライブ映像が届いてからだった。

大地が一面、真っ赤に溶けていた。

ゆらゆらと蒸気を上げて、まるで巨大な火口のような、灼熱の大地が、地平線の向こうまで広がっていた。

そのところどころに、溶け残った高層ビルの残骸と思われる構造物の残骸があって、それもゆっくりと溶け落ちつつあった。

それらの構造物があるのも、溶けた大地の周縁だけで、中心に近づくにつれて、大

地は、溶解したなにかがぎらぎらとゆらめく、マグマの水面に変わっていった。

その映像をみあげる吾朗くんの顔には、もはや何の表情も浮かんではいなかった。だって、ついさっきまで、吾朗くんは、東京のご両親と、疎開の話をしていたのだ。その電話の向こうで、Ｊアラート（空襲警報）が鳴って、吾朗くんの、シェルターに逃げて、というその言葉の途中で会話がぷつりと切れ、通常回線はシャットダウンしている、というアナウンスが数分流れて……それも、唐突にぷつりと切れたのだ。

そして今、東京は――放送のアナウンサーですら、意味のある言葉を何も発しない。

「つい先ほど、東京は人類解放軍の戦略攻撃を受けた模様です」

繰り返されるそのフレーズは、しかし、画面に映し出される惨禍を何も表現はしていなかった。

ふらり、と吾朗くんの体が、後ろ向きに揺らいだ。

「吾朗くん！」

反射的に駆け寄って……受け止めたその体がぐったりと重くて、まるでぷつりと電源が切れたロボットみたいだ、と思った。

@　@　@

静岡県浜松市中区
花菱デパート医務室
同日　15時51分

花菱の医務室は、家族連れの買い物や食事を見込んだ場所で、なにかあったときに安心してもらえるようにと、小さいながらもしっかりしたつくりだった。
カーテンに区切られたベッドの上で、吾朗くんは静かに横になっていた。
その傍らの椅子に、私はじっと座り込んでいる。
そして、吾朗くんが意識を取り戻したのは、もう夕方になろうという頃だった。

「吾朗くん」
声をかけたが、吾朗くんの反応は鈍い。
ゆっくりと顔をこちらに向けて、
「すみません……」
発した最初の言葉が、それだった。
「迷惑かけちゃいましたね……特別投影の準備は？」
「大丈夫、進んでるよ」
「よかった……」

吾朗くんは、また目を閉じた。
それ以上、何も言わなかった。

@　　@　　@

「三ヶ島さんですが……記憶の混濁は見られません」
先生は淡々と言った。私も何度か世話になった、初老の女医さんだった。
「ただ」
ドアの向こうで横たわっているであろう吾朗くんのほうに、先生は一瞬意識を向けたようだった。
そして、やりきれない、という顔をした。
「言うまでもないですけど、相当にショックを受けています。彼の親族は、こちらには？」
私は黙って首を振った。
事情を察したか、先生は、小さく息を吐いた。
「……あなたは？」
「私は……」
言葉が宙に消えた。

@　@　@

「吾朗君を一人にしておけるの？」
「……まさか」
「それじゃつれてらっしゃいな。どうせ里美、こういう時には、何もいえないでしょう。ほら、お母さんがそう言ってるって、言ってきなさい」

@　@　@

3．

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４９年８月11日水月）16時30分

雨が降っていた。
午後の炊き出しから戻った私たちは、合羽を着て長靴を履いてはいても、服に染み付く湿気だけはどうにもならない。
太陽は雲の向こうで沈みつつある。
天井の蛍光灯は、半分は取り外され、残りの半分も、光は弱々しく、いくつかは、

ちりちりと明滅しているものもあった。
窓の向こうでは、珍しくも、雷が鳴っている。
こんなに寒々しくても、季節は夏の夕暮れなのだ。
――館長の机のまわりに、皆が集まった。
「皆、遅い時間までありがとう」
その言葉に、何人かが頷いた。
館長から、話がある、と伝えられたのは、炊き出しに出かける前だった。
今までにないことだった。もし話があるなら、朝のミーティングで話せばいいのだから。だから――誰もが、いったい館長がどんな話をしようとしているのか――静かな緊張感が、部屋中に張りつめていた。
館長は、深い息をひとつ吐いた。そして、口を開いた。
「私たちの花菱プラネタリウムは、科学館などのそれとは違い、商業プラネタリウムだ。
しかしそれでも、だからこそ、私たちは、星の人（プラネタリアン）としての矜持を人一倍有しているべきだし、また、事実そうだと私は信じている。

また、この時局において、我々のみならず、世界中の星の人が、何とか世界をよくしようと、希望を見つけようと奮闘しているのは、皆も知っていることだと思う。

しかし、私たちの奮闘も虚しく、戦争は始まった。熱核兵器が東京をはじめとして、世界中の都市を吹き飛ばし、生化学兵器が人々を――街から荒野へと追いやった。

だが、それでも――私たちは、人類の未来のために、歩みを止めてはならない。どうしても希望をつなぐ必要がある。

みんな。この町にも、いずれ、戦略兵器が投下されるだろう。

いつまでもタカアシガニがそれを防ぎきれるはずもない。

あるいは私たちは、熱核攻撃で、この町ごと消し飛ばされてしまうのかも知れない。

だが、もし、それが生化学兵器だったとしたら……」

館長は、天井を見上げた。

「……少なくとも、このプラネタリウムは、地上から消し去られることなく、残る。私たちの誰もが、そこに残ることができないとしてもだ。故に……

これはあくまでも、もしも、の話だ。だが……」

館長はそう言ったが、その声色に確信があった。

そして、私は、次に館長が何を言うのか、わかってしまった。

「もしも……もしも、浜松に戦略生化学兵器が使用されたら、その時には……私たちは、ゆめみを連れて行かない」
その言葉が私たちに浸透するのを確認するかのように、じろり、と、館長は、私たち全員の顔を、見回した。そして、言った。
「彼女の仕事を全うさせるため、ゆめみをここに残して、私たちはこの町から撤退する」
また、雷が鳴った。
「私たちは、いつか遠い未来、ここを訪ねてくる誰かがいると信じよう。その日のために、その誰かに星を見せるために、私たちは最大限の努力をしよう」
館長はそう言うと、口をまっすぐに、一文字につぐんだ。
そして、私たちに背を向けて、扉に向かって歩き出した。
「ま、待ってください……！」
私は、思わず叫んだ。
「だって、ゆめみちゃんは……私たちの……」
「連れて行って、どうなる」
館長は、私の言葉を遮った。

「電源の確保もままならない。メンテナンスドッグも持ち出せない。ここを出れば、何日もしないうちに、ゆめみは動かなくなるだろう」
それは――きっと事実だ。いつか考えなければならない――でも、誰もが考えようとはしなかった、事実だった。
でも、
「でも、吾朗くんが……せめて、吾朗くんにも……！」
その私の声に、ようやく、館長は私たちの方を振り返った。
そして、言った。
「倉橋君」
その館長の声は、表情は、あまりにも寂しそうだった。
「他言無用のはずだったんだが……致し方ない。なあ……倉橋」
はっと、私は顔を上げた。館長が、懐かしい、あの『先生』の顔をしていた。
「これはもともと、三ヶ島君の発案なんだよ。一番ゆめみを大事にしてきた、あの三ヶ島君の、これは発案なんだ」

4．

@　@　@

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４９年８月12日（木）14時37分

フレーミング・コンテキスト・データベースが更新されない以上、ゆめみの認識能力は……認識できる世界の限界、その境界線は、いわば平時と戦時の境界線に他ならない。だから、ゆめみが「お客さま」の状態を正しく認識できないとしても、それは異常ではない。だが、明らかに状況は異常だった。

「星を見たいとおっしゃっているのですが、お金の持ち合わせがない、ということなんです。でも、弟さんが泣いていて、お姉さんが困っていて……」

「ご両親ともはぐれてしまって……」

「もういい」

館長が、ゆめみの言葉を遮った。

「見せてあげよう。星を」

そう言って館長は、ゆめみに歩み寄った。そして、ゆめみが無造作に抱えるその、姉弟の姉を、丁重に抱き上げた。

「来なさい」
「でも、お金が……」
「大丈夫、君たちはお客様だ。特別だよ……みんな、投影の準備だ」

そうして、投影は始まった。夏の星空の解説からはじまり、それが終わると、特別投影が始まった。映像はない。未完成なのだ。声だけの投影だった。テキストだって完成にはほど遠い。だが、解説をする里美の声は震えていたが、それでも最後まで声がとぎれることはなかった。そして、特別投影が終わった時には……そう、その時にはもう、すべては終わっていた。

@　@　@

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　機械室
同日　15時43分

吾郎は、ゆめみのコンソールに突っ伏していた。薄暗い部屋だった。
関係者以外立ち入り禁止の部屋で、ここにはきっと、自分の解説の声も聞こえていただろう、と里美は思う。

「吾朗君……」
吾朗が小さく身じろぎした。押し殺した、震える息の音がした。
その音が余りにも繊細で、張りつめていて、今にもはじけてしまいそうに聞こえて、反射的に里美はその背中に顔を押し当てた。声もなく、ただ静かに、二人は泣いていた。
「よかったね……星……見せてあげられて、よかったねえ……っ……！」
何の悲しみなのか、赦しなのか、後悔なのか、二人には……いや、もう、今やきっと世界の誰にも、わからなかった。

@　　@　　@

「ねえ、ゆめみちゃん」
「はい、何でしょうか、倉橋さん」
「楽しみだね、特別投影」
「はい。皆さんの思いが詰まった投影ですから」
「ゆめみちゃんさ」
「はい？」
「きっと、最初に解説するのは、ゆめみちゃんだよ」

「そうなんですか？　でも、倉橋さんや黛さんや古賀さんや森見さんの方が、楽しみにしていますから、最初の解説は皆さんの方が適任だと考えます」
「そうだね。でも、きっと、最初に解説するのは、ゆめみちゃんだと思う。きっと」
「すみません、倉橋さんの言葉が、うまく理解できませんでした」
「ううん……ごめん、いいの。それで」
「はい？」
「ありがとうね、ゆめみちゃん。特別投影、頑張ろうね」
「はい……ところで倉橋さん」
「なにかしら」
「どうして倉橋さんは、笑っているのに、涙を流されているのですか？」

@　@　@

非常口の緑の灯りにほんの僅かだけ照らされて、カール・ツァイスはドームの闇の中に、ただ静かにあった。
吾朗は天を仰いだ。
まるでそこに、偽物の星空が今にも煌めいているように。
その口が震えた。

「ゆめみ、お前を、もっといろいろなところに連れて行ってやりたかったよ」
絞り出すような声だった。

@　@　@

「いっそ、毒ガスじゃなくて、核兵器が降ってきたらいいのにね」
「……そんなことを、言わないでください」
「ごめん……ねえ、吾朗くん」
「はい」
「ゆめみちゃん連れてさ、どっかに逃げちゃおっか」
「それは……」
吾朗は、絶句した。
「――いいですね、とても」
その言葉に、里美は嘘を感じられなかった。
「……大丈夫、わかってるよ」
「どこかに、逃げられたらいいですね……」
「うん……そう、だね……」

@　@　@

5.

静岡県浜松市中区
花菱デパート屋上プラネタリウム館　事務室
２０４９年８月26日（木）16時８分

「三十分後……」
森見さんが絶句し、館長が天を仰いだ。
「ＢＣ兵器の使用宣言などと……常軌を逸している」
「自動報復装置のお気遣いってわけですか」
黛女史が吐き捨て、
「是非もなし、ですね……津野さん、イエナさんの保護措置を」
それから彼女は、わたしのほうに向き直った。
「いいですね」
答えられない私を見て、津野君が無言で立ち上がった。
イエナさんの中核部を分解し、またいつでも組み立てられるように、グリスで保護する作業。
それをしようというのだ。
「ま、待って！」

津野君が足を止めた。だが、振り返ることはない。
「まだ、《タカアシガニ》が……」
だが、黛女史は、黙って首を振った。
私だって、分かっている。
タカアシガニの迎撃成功率は、高々四十パーセントだ。
でも、まだ四十パーセント、少しでも、ほんのわずかでも、ゆめみちゃんとここにいられる時間が続く可能性があるなら……
「倉橋さん」
……吾朗君の声がした。
「僕は本館の六階に行きます。だから、倉橋さんは、ゆめみについていてあげてください」
六階？
ぞっとした。六階、そこにあるのは、花菱の電源室だ。
第二次世界大戦を生き延びた、無骨で頑丈な建物に、タカアシガニをはじめとする自衛隊の電源設備が集約されているのだ。
声が震えた。
「吾朗君、なにを……」

私のその問いに、吾朗君は、少しだけ顔を伏せ……寂しそうな、あまりにも悲しそうな顔で、答えた。
「タカアシガニの電源回路を破壊します。もしこの攻撃を防いだとして、次は核かも知れない。そうしたら、僕たちのプラネタリウムはおしまいです」
「でも！」
だが、吾朗くんは顔を上げた。なにかを決めたひと、の顔をしていた。
「これは、チャンスなんです。それに……ねえ、倉橋さん。これは流されるままじゃいけない、きっと、僕たちが、自分で決めないといけないことなんです」

@　@　@

花菱の六階のその高い窓の向こうで、タカアシガニが、天に向かって弾頭迎撃レールガンのその細長い砲身を、ぶわり、深々と正確に振り上げた。
まるで、それと呼吸を合わせるように見えた——吾朗は、鋭利な斧をすっと頭上に掲げた。
ジジ……とタカアシガニが電磁気の音をたてた。ギュゥグワァァ……その音が見る間に甲高い叫び声に変わっていく。
「吾朗くん！」

床にへたり込んだ里美の、その引き裂く叫び声、その悲痛すら、もはやかき消され、虚空に消えていく。

斧を振り上げた吾朗の脳裏に、あらゆるものが去来した。

天体望遠鏡をのぞき込んだ幼い日。

図書館に通い詰めた少年の日。

ロボット工学を学び、ゆめみに出会ったあの日。

花菱に着任したその日。

優しい日々。

みんなのこと。

そして……

「吾朗くんっ……！」

気づいたときには、もう感情は爆発していた。

「……無念ッ！」

吾朗が掲げた斧は、フロアに深々と突き刺さり、タカアシガニの緊急パワーラインを真っ二つに引き裂いていたのだ。

@　@　@

倉橋里美は泣いていた。
夕暮れだった。真横から差す夕暮れの光が、町を覆いつくす毒性生化学コロイドがチンダル現象を起こし、見上げる空はあまりにも眩しい橙だった。
「どうして……！？」
花菱新館を出ると、最早歩く気力もなくなってしまったかのように、倉橋里美は、石畳の上に崩れおちた。
その横に、吾朗はすっとしゃがみ込み、
「行きましょう」
その一言だけを、口にして――里美が顔を激しく振り上げ、そして――その顔がぐしゃりと歪んだかと思うと、その目からぼろぼろと涙があふれ出た。
「吾朗くん」
吐き出すような声だ。
「私、吾朗くんのこと、絶対に許さないからね……」
「わかってます」
「わかってないっ！」
「それも、わかってます」

その答えに、里美は、最早何の言葉もなかった。
背を丸め、額を地面につき、拳で地面を叩いて、泣いた。
その横に吾朗はただじっと座り込んでいた。
それからかれは、花菱本館を、その屋上のプラネタリウムのドームを見上げ、
「さよなら、ゆめみ」
ただ、そう一言、呟いた。

（終）

（二〇五〇）ケンタウルスを見上げて

神奈川県横浜市金沢区昭和町
海洋研究開発機構　シミュレータ棟
２０４９年８月26日（木）16時８分

端的に言って、結果は最悪だった。

プレ・シミュレーションで想定されたパターンの中でも、これはさすがにあり得ないだろうと思われていた総合評価指数の下限を、さらに数割のオーダーで下回っていた。

海洋研究開発機構ＪＡＭＳＴＥＣの気候変動シミュレーション・スタッフの誰もが、言葉をなくし、呆然と、あるいはもはや半笑いで立ち尽くした。なぜなら――彼等の目の前のシミュレータの中で、地球科学スケールのシミュレーションとしては完全に異常な事態が、九八パーセントという超々高確率で発生していたのだ。数十年という極端に短いオーダーの期間で、惑星・地球は人類に居住が可能な環境ではなくなる――即ち、人類は滅亡する――という、人類にとって、まったく未知の現象が。

@　　@　　@

横浜の海沿い、新杉田の埋め立て地、時間としては一応の定時のすこしだけ前。まるで巨大な体育館のような相互連想マトリクスシミュレータ棟を出ると、三ヶ島吾朗はいつものように空を見上げた。そして、朝と少しも変わらない分厚い灰色の雨雲をみとめると――しかし、あるいは日本人の美徳であろう自制を以て、静かに息を吐ききった。

計画本部は阿鼻叫喚の有様だった。特に、南洋の比較的温暖な地域への『友好的』避難計画を立案していた第二計画は……しかしそれは、言い換えるなら、地球寒冷化の現象的側面を科学的に追求する第一計画のスタッフは、もう半分お役御免である、ということもまた意味していた。

だから、吾朗は、家に帰ることにした。一刻も早く、里美の顔を見たかった。さもなければ――今すぐにでも、ここで叫びだしてしまいそうだった。

『人類は破滅だ！――僕たちはもう、おしまいだ！』――、と。

それでも……少しでも冷静になる時間を稼ごうと、吾朗は家までの二駅を歩くことにした。

海沿いの平坦な国道である。

横を軍用トラックやトレーラーが重々しく過ぎていく。
雨は激しく降るではなく。
ただ、さあさあ、さあさあと、
静かに、しかし止むことなく降り続けている。
頭の上の高架橋を、電車が駆けていく。
ＪＲの利用権利証明は配給されていたが、チケットも残り少ない。このご時世、節約しておくに超したことはない……はずだったが、それもあるいは無駄に終わるかも知れない。
なにしろ――そのＪＲなるものも、その利用権も、すべては降り積もる雪に埋まり、すべてはなかったことになってしまうのだから。
そして、根岸の駅から急坂を上がったところが、吾朗たちの家だった。家というよりはバラックであり、広場に所狭しと建てられたそれは、近隣の血筋のいい住民たちからは、こう呼ばれていた。曰く、『難民キャンプ』。

@　@　@

神奈川県横浜市中区根岸台
根岸森林公園　『キャンプ』

２０４９年８月26日（木）16時８分

『子供の相手は嫌いじゃないけどね』
いつだったか、里美は、そういって笑ってみせた。
『家庭教師役と宇宙怪獣役を同時にこなす』倉橋里美である。
ここ、根岸台キャンプに星の人の仕事はないが、子供の面倒を見る仕事なら山ほどあった。孤児、と呼ばれる子供たちは、根岸台キャンプに限らず、ありとあらゆるところで泣いている。人類が滅んでしまうまで、きっとその仕事はなくなることはないだろう。

恐らくは、そんなところを好きになったのだろうと、吾朗は思う。

根岸台キャンプは、もともとは浜松に住んでいた『難民』の住処だった。遅拡散性ＢＣ兵器の攻撃から生き残ることができた人間は多くはなかったけれど、それでも根岸台キャンプをはじめとする狭苦しいキャンプなどに収まりきれる数ではない。キャンプの部屋は狭く、『難民』は定員を無視して無理矢理に押し込められている。周囲を見渡せば、世情はあまりにも暗く、職も見つからない。廊下や階段のそこここに座り込む人々の発する陰惨の気配は、この世界のまさに縮図のようだった。
それでも、花菱の面々と一緒に脱出できた吾朗達は、比較的マシな部類に入ってい

る。ほとんど限界に近い狭さの部屋も、気心の知れた顔なら、なんとかやり過ごすこともできる。

しかも、吾朗は奇跡的に、なんとかまともな仕事にありつけてはいた――芸は身を助くというのは、どうやら本当らしい。

部屋には里美はいなかった。

端末の入った鞄をベッドに放ると、時計を確認する。

時計はもう、午後八時を回っていた。

夕食の時間は、もう終わっている。

レンズ豆のシチューは冷めるとひどく不味いが、温めなおしのような贅沢を言うわけにもいかない。

里美はまだ食堂だろうか……？

そんなことを考えながら、吾朗はぼんやりと廊下を歩いた。

そして、食堂のドアを押し開けて――

@　@　@

『おめでとうございますっ！』

@　　@　　@

派手な音に驚いて目をつむり、次の瞬間、視界いっぱいに紙吹雪が舞っていた。
呆然とする吾朗の目に――里美と、彼女を囲むようにして立つ見慣れた友人達の姿が映った。里美とチームであるところの森見由香や黛ちはや、古賀茜のみならず、津野秀史や館長まで、誰もが、満面――このキャンプでは、見るのがほとんど不可能とも思われるほどの――笑みを浮かべていて、その笑顔は吾朗に向けられている。拍手の音すら聞こえる。
「おめでとう！」
「おめでとうございますっ！」
口々に――なにかを……祝っている？
祝われている？
僕が？
と、吾朗の困惑を見て取ったか、由香が言った。
「里美さん、ほら！」
由香が里美の背中を物理的に押して――里美が一歩前に出た。
「里美さん……？」
一体何事かは判らないが、吾朗は反射的に呼びかけた。だが、

「うう……」
里美は口ごもる。
なにかを言いよどむなど、里美にしては珍しい。
というか、ほとんどあり得ない。里美の基本的なスタンスは、ツッコミだった。
しかし何が……と考えてみても、吾朗には何も思い浮かばなかった。皆が口々になにかを言っているが……吾朗は状況を理解できない。まったく想定外の事態に、吾朗の脳はほとんどハングアップ状態だった。
なにか僕に、祝われるようなことがあったか？
シミュレーションは確かに予定通りに終わった。
だが、それ自体は、こんなに大袈裟に祝われるほどのものではないし、内容は守秘義務の関係上、花菱のメンバーには一言も話してない。
しかもその結果は――祝うようなものじゃあない。断じて。
吾朗の思考が、明後日の方へと滑りはじめ……
そんな吾朗の表情に業を煮やしたのか、茜がやれやれとばかりに肩をすくめた。
「ね、里美さん、三ヶ島さんに察してほしいっていうのが、そもそも無理なんですよ！」
「そっスね」
津野がぼそっと余計な合いの手を入れ、茜がさらに言いつのる。
「ほらやるしかない言うしかない、女は度胸！」

「……ああもうッ！！」
突如、なにかを吹っ切ったように里美が切り出した。
「吾朗くん！」
「は……はい？」
声が裏返る吾朗を、涙目で睨みつける。
「あのね！」
あまりの気迫に、吾朗は息を飲んだ。
だがそんな彼をさらに追い詰める勢いで、里美は叫んだ。
「あ……赤ちゃんができましたッ！！」

@　@　@

吾朗の頭が、一瞬にして真っ白に飛んだ。
口元が震えはじめ――その右手は、ふるふると里美の方へと伸ばされた。
目は限界まで見開かれ、息は浅く、まるでひきつけを起こしているかのようだ。
その脳裏で――吹きすさぶ嵐が、町を、人を、星を、瞬く間に埋め尽くしていく。
声を上げることもできず、僕たちは為す術もなく、雪に埋もれていく。人工頭脳を数珠の如く繋げた相互連想マトリクスシミュレータの数式に基づいた、それは明白な

破滅のイメージだ。
その数式のなかで、吾朗は幼子を抱えて、立ち尽くしていた。
隣には、力尽きて倒れた人影がひとつ。
吾朗は力の限りに叫んでいた。
何故だ、どうして――どうすれば。
僕は……どうすればいい？
この完全な世界の終わりを目の前にして、僕は――
見渡す限りの凍える大地で――

突如、

吾朗の右手が、ふわり、と……暖かいなにかに包まれた。
白く吹き荒れる嵐の中、その両目が焦点を結び、その先にあったのは――里美の掌だった。まるで虚空を掴むが如く伸ばされた吾朗の右手を、里美の両手が包み込んでいた。
「吾朗くん……？」
真剣な、しかし隠しきれない不安が滲む表情で、里美はそう呼びかけた。

誰に？
僕にだ。
幻想の嵐は、まだ吾朗の体から熱を奪い続けている。
そのなかで、里美の声が、そして右手を包み込む熱だけが、リアルだった。
まるでなにかに縋るようにして、左手を伸ばし、吾朗は里美の手を握る。
そのやわらかな感触があまりに確かで――吾朗はそのまま膝から床に崩れ落ちた。
吾朗は泣いていた。
「ちょ、ちょっと吾朗くん！？」
頭上から里美の慌てた声がする。
「っ……ごめん……」
握りしめたままの里美の掌を額に押し当てるようにして、ひざまづいて何かに祈るように……吾朗は泣き続けていた。

@　@　@

隣では、里美が安らかな寝息を立てている。
暖房は十分ではないが、二人で潜り込んだ布団は、あたたかであると、吾朗は感じた。

いや、もう「二人」ではないのか。
と吾朗は思い、それから――相互連想マトリクスシミュレータがはじき出した自分たちの未来に思いを馳せた。
守秘義務を自分へのいいわけにして、吾朗は里美には何も語らなかった。だが、それでも里美は、なにかを感じ取ったようだった。
吾朗がＪＡＭＳＴＥＣに雇われていることは秘密でも何でもなかったし、並列電脳プログラマである吾朗がＪＡＭＳＴＥＣに雇われる理由は、ほとんど明白と言ってもいい。
そして今日、吾朗の尋常ならざる様子、その理由を、誰も尋ねようとはしなかった。吾朗が何を知ってしまったのか、里美も、花菱の皆も、もう薄々察してくれているのかもしれない。
それでも、里美の寝顔は穏やかだった。
なにが里美をそうさせているのか、吾朗にはよく判らなかった。
そしてまた、里美と居ると、なぜか吾朗の心も穏やかでいられた。
人類は滅びるのだ、という高確率で確定した未来のことを考えれば、不思議なものだと我ながら思う。その理由も、やはりよく判らない。
ただ、なにか――予感のようなものを、吾朗は感じていた。

そのなにかが何なのか、吾朗は考えて……そして思いだした。
『宇宙に羽ばたく人類の夢』。
あの、一度も使われることのなかった特別投影。
企画の初期段階で、ずいぶんと里美と議論したものだ。
それはつまり、
人類は果たして、どこまで羽ばたいていけるのか――。

……くすり、と吾朗は笑った。
あまりに自分の考えがおかしかったのだ。
「ん……」
隣の里美が身をよじった。
「……なに？」
どうやら、起こしてしまったようだ。
「いや……」
すこし考えて、吾朗は続けた。
「健太、っていうのはどうかな」
「……名前？」
「そう」

「……いい、案だと思うけど……どうして？」
「アルファ・ケンタウリ」
一瞬の間――を置いて、里美が笑った。
「？」
「吾朗くんらしいわね」
「そうかな」
「こんな時まで、『星の人』」
「……」
「いいと思うわよ」
「そう？」
「少なくとも、希望がある名前だから」
希望か、と吾朗は思う。
考えてみれば、里美の言うとおりだった。
この地上に絶望しかないのならば、しかし、あるいは別の新天地には希望はあり得るかも知れない。
「そう。だから、健太」
そう言う里美は、穏やかだった。
おそらくは、この惑星の未来に気付きかけてはいるだろうけれども、それでも。

そして、里美は言った。
「それもいいけど、『ケン』っていうのはどうかしら」
「短いほうが？」
「もう、日本もないじゃない？」
「そうか……いっそ正式に『ケネス』」
「それはどうかな」
里美は苦笑いした。
さすがに飛躍しすぎか……と、吾朗の脳裏を過ぎることがあった。
仮想地球儀にマッピングされた、流体力学的振る舞い。
その中に——比較的低い確率であるにせよ——確かに生起しているようにも見えた、カオス系の不安定特異点——
「里美さん」
「ん？」
「南米は嫌い？」
「南米？」
「そう」
里美はすこしだけ考えて、
「いいわよ」

とだけ答えた。
「理由は訊かないの？」
「任せるわ……そこが一番、いいんでしょ」
「シミュレーション上は――パタゴニアが、可能性がいちばん高い」
「うん……ならいい」
本当にあっさりとした声で、里美は言った。
腹が据わっているものだと吾朗は改めてすこし呆れた。
或いは、単に眠かったのかも知れない。
それから数分もしないうちに、すぐに静かな寝息が聞こえはじめた。
こんな時ですら、この人は動じないんだもんな……。
隣で眠る自分の大切な人を眺めて、吾朗は改めてすこし呆れた。
「ケン……」
小さな声が聞こえた。
あるいは、寝言かも知れない。
吾朗は、天井を見上げた。
その向こうにある星空のなかに、ケンタウルス座が浮かんでいた。

ここからは、アルファ・ケンタウリは地平線に隠れて見えないが、吾朗には、その姿をありありと思い浮かべることができた。

そして――ほとんど夢物語だと知りつつも――里美のお腹の子が、どうすればその星に辿りつけるのか、吾朗は考えはじめていた。

（了）

あとがき

僕の記憶が確かならば、このお話の原案は、二〇一七年二月に、れもたろさんから頂いたのです。たしか、酒席でのことで、その数日後に、パワポ数枚の企画書もどきをれもたろさんに送りつけて、そこから始まったお話でした。

そのあと――皆様ご存知の通り――れもたろさんはお仕事で大活躍され、瀧川も瀧川で、諸々忙しくなってしまい――仕事を変わったのと、それから、うみけっと準備会のほうの活動と――もう一時は完成も危ぶまれたのですが、この浜松の機会を逃しては一生後悔すると思い、読んで頂いた方には、あるいは感じさせてしまったかも知れません、よく読めばつぎはぎな形ではありますが、なんとか物語に仕立て上げた次第です。

大変、お待たせしました。

楽しんで頂ければ幸いです。

@　@　@

当初は、もっとやわらかいというか、ジャンルのテイストに寄せた、希望を見つけ

られる作風だったのですが、三年の月日のあいだに、少し物語の傾向が変わったようです。そのことについて、少しだけ書きます。

@　　@　　@

如何ともし難いことにどう向き合うか――ということを、考えることがあります。マクロなことも、ミクロなことも、生きると言うことは、如何ともし難いことがたくさんあります。僕の友人達は優しい人が多いですから、悲しんだり、怒ったり、あるいは落ち込んで帰ってこないこともあり――形は様々ですが、その優しさを見せてくれます。

しかし、それでも人は病気になり、争いは起こり、人は死ぬ。優しさに裏打ちされた悲しみや怒りだけが世界に残っていくのです。

そんなとき、私たちはたくさんの嬉しいこと、おおくの美しいもの、それらでバランスを取ろうと試みますが、数学的にはそれは不安定解に他ならない。怒りや悲しみを嬉しいことや美しいものでバランスを取ることは、その絶対量が多ければ多いほど、困難で、成功率が低く、リスクを伴います。そして、その絶対量がフィードバック制御の精緻さの限界を超えたとき、怒りや悲しみを、美しさや嬉しさで穴埋めする戦略は、破綻するのです。

そうしないためには、どうすればいいのか。怒りや悲しみ、美しさや嬉しさの絶対量を、フィードバック制御可能な範囲に収めるには、一体どうすればいいのか。答えは明白です。世界がもたらすそれらの怒りや悲しみ、美しさや嬉しさを、己の中に取り込むときに、制御可能な大きさに収めてしまうしかない。事ここに至って、もはや、一定程度、自分が自分を御しうる程度まで無神経になる以外に、破綻しない道はない、と。しかしそれは——あまりに無念であり、許されないことではないですか。

この本に収録した話のうち、一番最後に書いたのが、吾朗くんと里美さんが花菱デパート屋上プラネタリウム館を脱出するときの話です。そんなことを考えながら、書いた話でした。

決して希望のある話ではありません。だって、吾朗くんも、里美さんも、まがいものの希望なんて見抜いてしまうでしょうから。それでも、僕は、吾朗くんと里美さんに、それでもいい、生きていてほしかったのです。本物の苛烈さに圧殺されることもなく、まがいものに縋ることもなく。本物の苛烈さに圧殺されず、まがいものに縋らなかったことを誇りとして、無念でも、許されなくても、ただ生きよ、と。そして思うのです。ほんとうの優しさなるものがこの世にあるとすれば、それは、そんなところにしかないのかも知れない、と。

与太話でした。こんなところまで読んで頂いて、ありがとうございます。

@　@　@

さて、次回作ですが――未定です。これは本当に未定で、なにかできることがあるか、それも分かりません。でも、何かしたいですね。

うみけっと準備会のほうも、これは続けていきたいと思っています。続けていくつもりです。こんなことを考えて、書いて――ということができているのも、場があってこそ。それは何とか、守っていきたいな、と思っています。

それでは、いつか、きっとどこかで。また逢いましょう！

二〇二〇年二月一六日

瀧川新惟

（二〇五六）エピローグ

ぱちぱちと爆ぜるような音を聞いて、私は、小さな頃のキャンプを思い出していた。
森の中の開けた場所。
川の流れ。
焚き火。
お父さん。
お母さん。
薄手を羽織るくらいに涼しい夜。
ささやかなバーベキュー。
テント。
天体望遠鏡。
満天の星空。
――吾朗くん。
その吾朗くんは、仰向けに倒れている私をかばうように覆い被さっている。

もう、その腕には力がない。
遠くから、逃げろ、という叫び声が聞こえる。
どうやら、この瓦礫の下から抜け出す方法はなさそうだった。
今日もひどい寒空だが、今は少し暖かい。
火の手が回っているというのに、私はそんなのんびりとしたことを考えていて、
それがおかしくて、少し笑った。
ああ、あの子が今日、ここにいなくてよかった。
そして、祈った。
どうか、あの子が強く生きていけますように。
たとえこの世界が、どんなにひどい世界であっても。
それでも、生きていきますように、と。
さっきから脇腹がひどく痛む。
意識が朦朧とする。
そして――雲間から、星が見えた。
霞む視界のなかで、しかし、はっきりと。

「ねえ、吾朗くん、星だよ」

答えはなかった。
でも、私にはわかった。
吾朗くんはきっと、静かに笑ってくれた。
そんな気配がした。

――どうやら、火の手が回るより、意識が消える方が早そうだ。
目を閉じる。
私に残ったのは、冷たく濡れた地面の感触と、吾朗くんのぬくもりだけだ。
そして、意識を手放す最後の瞬間に、私は、確かに聞いた。

『プラネタリウムはいかがでしょう』
『どんな時も決して消えることのない、美しい無窮のきらめき』
『満天の星々が、みなさまをお待ちしています』
『プラネタリウムはいかがでしょう――』

（完）